根源仏典 3

記憶修習の現象化に関係づけられた経典

Satipaṭṭhāna-Saṁyutta

責任監修　真理の御魂（みたま）　最聖　麻原彰晃尊師
訳　サキャ神賢直説根源仏典翻訳チーム

根源仏典 3

記憶修習の現象化に関係づけられた経典

Satipaṭṭhāna-Saṁyutta

責任監修　真理の御魂（みたま）　最聖　麻原彰晃尊師
訳　サキャ神賢直説根源仏典翻訳チーム

序

「四念処」という言葉がある。この四念処とは、身体に対して、感覚に対して、そして心に対して、およびいろいろな社会通念に対して心を思いめぐらし、思索・熟考することを表わす。
この言葉に初めにわたしが行き着いたとき、わたしは、「念」という言葉に大変引っかかった。
「〝念〟とは何であろうか……。」
そしてその答えを出すのに、なんと十年近くの歳月がかかったのである。そしてこの「念」の意味合いがはっきりわかったとき、わたしは、仏教のすべての体系を体得した気持ちとなった。

「念」――、すなわち記憶をし、その記憶したものを何度も何度も修習することであると。

――そして、「すべては心の働きである」という仏教の考え方と、この「念」との考え方が一目瞭然であることは、賢明な読者であるならばよくご理解いただけることであろう。なぜならば、心の現われがすべてであるとするならば、その人が何を記憶し、そして何を修習し続けるかによって、その人の心の働きによって生じた世界というものは形成されるからである。

そしてオウム真理教では、この四念処を「四つの記憶修習の現象化」と名づけた。この理由については、先程の内容を理解していただけることによって意味合いは通じるはずである。そして、今回この「四つの記憶修習の現象化」を翻訳することができて、わたしとそれから翻訳チーム一同、大変な喜びである。

この経典によって、すべての人が真理の記憶をなし、修習し、
それによって素晴らしい現象が起きますように――。

麻原彰晃

根源仏典3

記憶修習の現象化に関係づけられた経典
（サティパッターナ・サンユッタ）

目次

第五　不死品

※『記憶修習の現象化に関係づけられた経典（Satipatthana-Samyutta）』の翻訳は、Pali Text Societyの『Samyutta Nikaya Vol.V』をテキストとした。なお、確実に誤植と思われるところは、（　）内で正しい言葉を補うことにした。

第三　記憶修習の現象化に関係づけられた経典
（サティパッターナ・サンユッタ）

第一　アンバパーリ品

【一】第一　アンバパーリ

一　このようにわたしは聞いた。
あるとき、世尊はヴェーサーリー（広大王によって造られた都市）のアンバパーリ（マンゴー園の守護者）林にとどまっておられた。
二　そこで実に、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。
「向煩悩滅尽多学男たちよ」と。
「尊師よ。」
と、その向煩悩滅尽多学男たちは、世尊に承諾し申し上げた。世尊はこう演説な

さった。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、このただ一つの軌道の道は、種々の生命体の清浄のためであり、種々の不運な出来事と悲嘆に対して自由になるためであり、種々の苦しみと落胆の全滅のためであり、正しい体系の習得のためであり、煩悩破壊の現証(げんしょう)のためである。すなわち、四つの記憶修習の現象化である。四つとは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、このただ一つの軌道の道は、種々の生命体の清浄のためであり、種々の不運な出来事と悲嘆に対して自由になるためであり、種々の苦しみと落胆の全滅のためであり、正しい体系の習得のためであり、煩悩破壊の現証のためである。すなわち、四つの記憶修習の現象化である」と。

六　世尊はこれを演説なさった。大喜びしたその向煩悩滅尽多学男たちは、世尊のお説きになったことに喜びを見いだした。

【二】第二　記憶修習

一　あるとき、世尊はヴェーサーリーのアンバパーリ林にとどまっておられた。

二　そこで実に、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ」と。
「尊師よ。」
と、その向煩悩滅尽多学男たちは、世尊に承諾し申し上げた。世尊はこう演説なさった。
三 「向煩悩滅尽多学男たちよ、向煩悩滅尽多学男は記憶修習し正智して時を過ごしなさい。これが君たちに対してわたしたちが諭すことである。
四 向煩悩滅尽多学男たちよ、そしてどのように、向煩悩滅尽多学男は記憶修習するのだろうか。
向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は記憶修習する。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、そしてどのように、向煩悩滅尽多学男は正智するのだろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、進むとき、退くとき正智してなし、前を見るとき、後を見るとき正智してなし、曲げるとき、伸ばすとき正智してなし、正装衣と鉢と上衣を身につけるとき正智してなし、食べたとき、飲んだとき、かんだとき、味わったとき正智してなし、糞便や小便の行為において正智してなし、行ったとき、とどまったとき、座ったとき、眠ったとき、起きたとき、話したとき、黙っているとき正智してなす。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は正智する。

六 向煩悩滅尽多学男たちよ、向煩悩滅尽多学男は記憶修習し正智して時を過ごしなさい。これが君たちに対してわたしたちが諭すことである」と。

【三】第三 向煩悩滅尽多学男

一 あるとき、世尊はサーヴァッティ（すべてのものがある）のジェータ（勝利者）林にあるアナータピンディカ（貧しい人に施し物を与える人）の大庭園にとどまっておられた。

二 直ちに、ある向煩悩滅尽多学男は世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼してそばに座った。そばに座ったその向煩悩滅尽多学男は、実に世尊にこう申し上げた。

三 「尊師よ、どうかわたしのために、世尊は要するに法則を指し示してくださ

い。わたしは世尊の法則を聴き、一人で隠遁し、怠惰でなく、熱心に、不屈の意志を持ってとどまることができます」と。

「ところで、まさにこのようにここに、ある真理の法則の実践と無縁な男たちはわたしに願い求め、それのみならずそして法則が説かれたとき、まさにわたしに従うべきであることを考える」と。

「尊師よ、わたしのために、世尊は要するに法則を指し示してください。最上善(さいじょうぜん)逝(ぜい)は要するに法則を指し示してください。まさしくたぶん、わたしは世尊の話の意義に気づくことができます。まさしくたぶん、わたしは世尊の話の継承者であることができます」と。

「向煩悩滅尽多学男よ、だから、君はどうしても最初に、種々の善の法則において清浄にさせなさい。そして、最初の種々の善の法則には何があるか。正しく清浄な戒と誠実な見解とがある。

向煩悩滅尽多学男よ、実に君に正しく清浄な戒と誠実な見解とが生じるであろ

うときから、向煩悩滅尽多学男よ、君は戒によって戒を確立して、四つの記憶修習の現象化を三種類に修習しなさい。四つとは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男よ、ここに君は、あるいは心の中に、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。あるいは外側に、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。あるいは心の中と外側に、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

あるいは心の中に、種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。あるいは外側に、種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。あるいは心の中と外側に、種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界におけ

る渇望と落胆を除去しなさい。

心の中に、心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。外側に、心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。心の中と外側に、心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

あるいは心の中に、種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。あるいは外側に、種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。あるいは心の中と外側に、種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男よ、実に君が戒によって戒を確立して、これら四つの記憶

修習の現象化をこのように三種類に修習するときから、向煩悩滅尽多学男よ、君には、あるいは夜あるいは日中に移っても、まさに種々の善の法則において発達が望まれ、衰退は全く望まれることがない」と。

六　直ちに、その向煩悩滅尽多学男は、世尊のお説きになったことに喜びを見いだし、感謝して、座から立って、世尊に敬礼し、右回りの礼をして去ったのである。

七　直ちに、その向煩悩滅尽多学男は一人で隠遁し、怠惰でなく、熱心に、不屈の意志を持ってとどまり、程なくして、その利益のために、良家の息子たちがまさに完全に家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送る、その無上の神聖行（しんせいぎょう）の完達（かんたつ）を、まさに見られる法則において、自ら証智（しょうち）し現証し達成してとどまった。「生は破壊され、神聖行は果たされ、なすべきことはなされ、引き続いてこの世に存在することの結果を得ることはない」と証智した。

八　そしてしたがって、その向煩悩滅尽多学男は、供養値魂（くようちこん）たちのある者になっ

たのであると。

【四】第四　矢印

一　このようにわたしは聞いた。

あるとき、世尊はコーサラ（十分な貯蔵室）国のサーラー（堂）祭司村にとどまっておられた。

二　そこで実に、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ」と。

「尊師よ。」

と、その向煩悩滅尽多学男たちは、世尊に承諾し申し上げた。世尊はこう演説なさった。

三「向煩悩滅尽多学男たちよ、出家して間もなく、新しくこの法則と修行に新

参のその向煩悩滅尽多学男たちは、向煩悩滅尽多学男たちよ、偽りなく、四つの記憶修習の現象化の修習に鼓舞され、定着され、確立されなければならない。四つとは何であろうか。

四　友よ、君たちは行きなさい。身において身を観察してとどまり、熱心に正智して、一点に集中し、清澄な心で、サマディに入り、沈着な心で、身に対して如実に精通する結果を得る。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智して、一点に集中し、清澄な心で、サマディに入り、沈着な心で、種々の感覚に対して如実に精通する結果を得る。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智して、一点に集中し、清澄な心で、サマディに入り、沈着な心で、心に対して如実に精通する結果を得る。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智して、一点に集中し、清澄な心で、サマディに入り、沈着な心で、種々の法則に対して如実に精通する

結果を得る。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、同様に、意識を得られないで、無上のヨーガ安らぎを欲しながら時を過ごしている、その有学（ゆうがく）の向煩悩滅尽多学男たちも、身において身を観察してとどまり、熱心に正智して、一点に集中し、清澄な心で、サマディに入り、沈着な心で、身に対して理解する結果を得る。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智して、一点に集中し、清澄な心で、サマディに入り、沈着な心で、種々の感覚に対して理解する結果を得る。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智して、一点に集中し、清澄な心で、サマディに入り、沈着な心で、心に対して理解する結果を得る。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智して、一点に集中し、清澄な心で、サマディに入り、沈着な心で、種々の法則に対して理解する結果を得る。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、同様に、供養値魂たちであり、漏(ろ)を破壊した者たちであり、完成に到達した者たちであり、なすべきことをなし、重荷を捨て、魂の究極の利益を体得し、生存のきずなを完全に破壊し、正しく悟って離解脱したその向煩悩滅尽多学男たちも、身において身を観察してとどまり、熱心に正智して、一点に集中し、清澄な心で、サマディに入り、沈着な心で、身から切り離される。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智して、一点に集中し、清澄な心で、サマディに入り、沈着な心で、種々の感覚から切り離される。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智して、一点に集中し、清澄な心で、サマディに入り、沈着な心で、心から切り離される。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智して、一点に集中し、清澄な心で、サマディに入り、沈着な心で、種々の法則から切り離される。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、同様に、出家して間もなく、新しくこの法則と修

行に新参のその向煩悩滅尽多学男たちは、向煩悩滅尽多学男たちよ、偽りなく、これらの記憶修習の現象化の修習に鼓舞され、定着され、確立されなければならない」と。

【五】第五　善の積み重ねた山

一―二　サーヴァッティ。そこで実に、世尊はこう演説なさった。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、五つの障害を、不善の積み重ねた山と断言することは、正しく断言して断言するべきだ。向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは、すべての部分を含むこの不善の積み重ねた山は、すなわち五つの障害だからである。五つとは何であろうか。

四　愛欲の衝動による障害、害心による障害、頑固と愚鈍による障害、興奮と後悔（エネルギー不足）による障害、疑念による障害である。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの障害を、不善の積み重ねた山と断言することは、正しく断言して断言するべきだ。向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは、すべての部分を含むこの不善の積み重ねた山は、すなわち五つの障害だからである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの記憶修習の現象化を、善の積み重ねた山と断言することは、正しく断言して断言するべきだ。向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは、すべての部分を含むこの善の積み重ねた山は、すなわち四つの記憶修習の現象化だからである。四つとは何であろうか。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの記憶修習の現象化を、善の積み重ねた山と断言することは、正しく断言して断言するべきだ。向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは、すべての部分を含むこの善の積み重ねた山は、すなわち四つの記憶修習の現象化だからである」と。

【六】第六　鷹族

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、その昔、鷹族が突然ウズラ族の鳥に迫ってきて捕らえた。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、直ちに、ウズラ族の鳥は鷹族によって取り去られて、このように悲嘆した。

『牧草でない敵の境界において動き回って生活したわたしたちはまさに不幸であり、わたしたちは功徳が少ない。もし今日、わたしたちが自分自身の牧草である父から相続した境界において動き回って生活するならば、すなわちこの鷹族がわたしと戦争することがかなっていることはなかったに違いない』と。

『ところで、ウズラ族よ、お前にとって自分自身の牧草である父から相続した境界は何だ』と。

『すなわち、鋤（すき）によって耕された土の固まりの場所だ』と。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、直ちに、鷹族は自分自身の能力においてこだわらず、自分自身の能力において合致せず、ウズラ族の鳥を手放した。

『ウズラ族よ、行け。実にお前がそこに行っても、わたしによって解き放つようなことはない』と。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、直ちに、ウズラ族の鳥は鋤によって耕された土の固まりの場所に行き、大きい土の固まりに乗って、鷹族に話しかけてとどまった。『鷹族よ、実に今わたしに向かって来なさい。鷹族よ、実に今わたしに向かって来なさい』と。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、直ちに、鷹族は自分自身の能力においてこだわらず、自分自身の能力において合致せず、双方の翼を束ね、突然ウズラ族の鳥に迫ってきた。向煩悩滅尽多学男たちよ、実にウズラ族の鳥は、

『実にこの鷹族がわたしに向かって来た。』

と、はっきりと気づいたときはいつも、それでまさにその土の固まりの中に引き下がることを生じさせた。向煩悩滅尽多学男たちよ、直ちに、鷹族はまさしく同じ場所で胸に対して打ったのである。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、托鉢(たくはつ)でない敵の境界において動き回って生活する者は、全くこのようになる。向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、托鉢でない敵の

境界において動き回って生活してはならない。向煩悩滅尽多学男たちよ、托鉢でない敵の境界において動き回って生活した者には、破滅天が近づく機会を得て、破滅天が好機を得るのである。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、向煩悩滅尽多学男にとって托鉢でない敵の境界とは何であろうか。すなわち、五つの愛欲の構成部分である。五つとは何であろうか。

一〇　眼によって識別される種々の形状-容姿は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、耳によって識別される種々の声は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、鼻によって識別される種々の香りは、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、舌によって識別される種々の味は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、身によって識別される種々の接触は、

希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これが向煩悩滅尽多学男の托鉢でない敵の境界である。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、自分自身の托鉢である父から相続した境界を動き回って生活しなさい。向煩悩滅尽多学男たちよ、自分自身の托鉢である父から相続した境界を動き回って生活するならば、破滅天が近づく機会を得ることはなく、破滅天が好機を得ることはない。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、向煩悩滅尽多学男の自分自身の托鉢である父から相続した境界とは何であろうか。すなわち、四つの記憶修習の現象化である。四つとは何であろうか。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除

去しなさい。
種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
向煩悩滅尽多学男たちよ、これが向煩悩滅尽多学男の自分自身の托鉢である父から相続した境界である」と。

【七】第七　猿

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、山の王・雪山には、まさに猿の群れが動き回っ

て生活せず、人間たちが動き回って生活していない所に、種々の困難な道や種々のでこぼこな地区がある。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、山の王・雪山には、全く実に猿の群れが動き回って生活し、人間たちが動き回って生活していない所に、種々の困難な道や種々のでこぼこな地区がある。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、山の王・雪山には、猿の群れが動き回って生活し、それのみならずそして人間たちも動き回って生活する所に、平坦で満足できる種々の区域がある。

向煩悩滅尽多学男たちよ、そこで、猟師は種々の猿の通りにおいて、猿の群れを虐げるためのとりもちわなを仕掛ける。

向煩悩滅尽多学男たちよ、そこで、愚者に生まれていない、素行悪く生まれていないその猿の群れは、そのとりもちわなを見て、遠ざかって避ける。しかし、愚者に生まれ、素行悪く生まれたその猿は、そのとりもちわなに至り、手で取る。

彼はそこで縛られる。手を解き放たせようと、第二の手で捕らえる。彼はそこで縛られる。双方の手を解き放たせようと、足で捕らえる。彼はそこで縛られる。双方の手と足を解き放たせようと、第二の足で捕らえる。彼はそこで縛られる。双方の手と両足を解き放たせようと、唇で捕らえる。彼はそこで縛られる。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、このように全く、その猿は五カ所に仕掛けられて、うめきながら横たわり、災難に陥り、損失に陥り、猟師にとって職務にしたがって感覚の喜びの対象となる。向煩悩滅尽多学男たちよ、すぐに猟師は突き通して、まさに彼の一片の木材で作られた炭火の中に投下させ、どんな好きな所へでも出発する。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、托鉢でない敵の境界において動き回って生活する者は、全くこのようになる。向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、托鉢でない敵の境界において動き回って生活してはならない。向煩悩滅尽多学男たちよ、托鉢でない敵の境界において動き回って生活した者には、破滅天が近づく機会を得て、

破滅天が好機を得るのである。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、向煩悩滅尽多学男にとって托鉢でない敵の境界とは何であろうか。すなわち、五つの愛欲の構成部分である。五つとは何であろうか。

九　眼によって識別される種々の形状-容姿は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、耳によって識別される種々の声は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、鼻によって識別される種々の香りは、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、舌によって識別される種々の味は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、身によって識別される種々の接触は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これが向煩悩滅尽多学男の托鉢でない敵の境界である。

一〇　向煩悩滅尽多学男たちよ、自分自身の托鉢である父から相続した境界を動き回って生活しなさい。向煩悩滅尽多学男たちよ、自分自身の托鉢である父から相続した境界を動き回って生活するならば、破滅天が近づく機会を得ることはなく、破滅天が好機を得ることはない。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、向煩悩滅尽多学男の自分自身の托鉢である父から相続した境界とは何であろうか。すなわち、四つの記憶修習の現象化である。四つとは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これが向煩悩滅尽多学男の自分自身の托鉢である父から相続した境界である」と。

【八】第八　調理人

一

三「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、愚者で未熟で不善の調理人が、国王や宰相たちに、同様に最上に酸っぱく、同様に最上に苦く、同様に最上にとんが

らしのようにからく、同様に最上においしく、同様にアルカリで、同様にアルカリでなく、同様に塩からく、同様に塩からくない、様々なでき上がりのスープによって成し遂げるようなものである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にその彼、愚者で未熟で不善の調理人は、自分自身の食事の兆候を獲得することがなく、あるいは『今日、このスープ類の食事がわたしを耽溺（たんでき）させる』と、あるいはこれに対して行って取ってきて、あるいはこれの多くを取り、あるいはこれに対して賛美する。

あるいは『今日、最上に酸っぱいスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいは最上に酸っぱいものに対して行って取ってきて、あるいは最上に酸っぱいものの多くを取り、あるいは最上に酸っぱいものに対して賛美する。

あるいは『今日、最上に苦いスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいは最上に苦いものに対して行って取ってきて、あるいは最上に苦いものの多くを取り、あるいは最上に苦いものに対して賛美する。

あるいは『今日、最上にとんがらしのようにからいスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいは最上にとんがらしのようにからいものに対して行って取ってきて、あるいは最上にとんがらしのようにからいものの多くを取り、あるいは最上にとんがらしのようにからいものに対して賛美する。

あるいは『今日、最上においしいスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいは最上においしいものに対して行って取ってきて、あるいは最上においしいものの多くを取り、あるいは最上においしいものに対して賛美する。

あるいは『今日、アルカリのスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいはアルカリのものに対して行って取ってきて、あるいはアルカリのものの多くを取り、あるいはアルカリのものに対して賛美する。

あるいは『今日、アルカリでないスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいはアルカリでないものに対して行って取ってきて、あるいはアルカリでないものの多くを取り、あるいはアルカリでないものに対して賛美する。

あるいは『今日、塩からいスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいは塩からいものに対して行って取ってきて、あるいは塩からいものの多くを取り、あるいは塩からいものに対して賛美する。

あるいは『今日、塩からくないスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいは塩からくないものに対して行って取ってきて、あるいは塩からくないものの多くを取り、あるいは塩からくないものに対して賛美する」と。

五　「向煩悩滅尽多学男たちよ、実にその彼、愚者で未熟で不善の調理人は、そしてどうしても、衣類の利得のある者とならず、給料の利得のある者とならず、種々の褒美(ほうび)の利得のある者とならない。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは同様に、その愚者で未熟で不善の調理人は、自分自身の食事の兆候を獲得することがないからである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、ここに、ある愚者で未熟で不善の向煩悩滅尽多学男が、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を

持って、世界における渇望と落胆を除去しても、彼の身において身を観察してとどまるとき、心はサマディに入らず、種々の煩悩を増長させるものは捨断（しゃだん）されず、彼がその兆候を獲得することはない。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しても、彼の種々の感覚において感覚を観察してとどまるとき、心はサマディに入らず、種々の煩悩を増長させるものは捨断されず、彼がその兆候を獲得することはない。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しても、彼の心において心を観察してとどまるとき、心はサマディに入らず、種々の煩悩を増長させるものは捨断されず、彼がその兆候を獲得することはない。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しても、彼の種々の法則において法則を観察して

とどまるとき、心はサマディに入らず、種々の煩悩を増長させるものは捨断されず、彼がその兆候を獲得することはない。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にその彼、愚者で未熟で不善の向煩悩滅尽多学男は、そしてどうしても、まさに見られる法則において種々の楽の時を過ごすことの利得のある者とならず、記憶修習と正智の利得のある者とならない。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは同様に、その愚者で未熟で不善の向煩悩滅尽多学男は、自分自身の心の兆候を獲得しないからである。

二

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として同様に、賢者で成熟した善の調理人が、国王や宰相たちに、同様に最上に酸っぱく、同様に最上に苦く、同様に最上にとんがらしのようにからく、同様に最上においしく、同様にアルカリで、同様にアルカリでなく、同様に塩からく、同様に塩からくない、様々なでき上がりのスー

プによって成し遂げるようなものである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、実にその彼、賢者で成熟した善の調理人は、自分自身の食事の兆候を獲得し、あるいは『今日、このスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいはこれに対して行って取ってきて、あるいはこれの多くを取り、あるいはこれに対して賛美する。

あるいは『今日、最上に酸っぱいスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいは最上に酸っぱいものに対して行って取ってきて、あるいは最上に酸っぱいものの多くを取り、あるいは最上に酸っぱいものに対して賛美する。

あるいは『今日、最上に苦いスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいは最上に苦いものに対して行って取ってきて、あるいは最上に苦いものの多くを取り、あるいは最上に苦いものに対して賛美する。

あるいは『今日、最上にとんがらしのようにからいスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいは最上にとんがらしのようにからいものに対して行って

取ってきて、あるいは最上にとんがらしのようにからいものの多くを取り、あるいは最上にとんがらしのようにからいものに対して賛美する。

あるいは『今日、最上においしいスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいは最上においしいものに対して行って取ってきて、あるいは最上においしいものの多くを取り、あるいは最上においしいものに対して賛美する。

あるいは『今日、アルカリのスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいはアルカリのものに対して行って取ってきて、あるいはアルカリのものの多くを取り、あるいはアルカリのものに対して賛美する。

あるいは『今日、アルカリでないスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいはアルカリでないものに対して行って取ってきて、あるいはアルカリでないものの多くを取り、あるいはアルカリでないものに対して賛美する。

あるいは『今日、塩からいスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいは塩からいものに対して行って取ってきて、あるいは塩からいものの多くを取り、

あるいは塩からいものに対して賛美する。

あるいは『今日、塩からくないスープ類の食事がわたしを耽溺させる』と、あるいは塩からくないものに対して行って取ってきて、あるいは塩からくないものの多くを取り、あるいは塩からくないものに対して賛美する」と。

九 「向煩悩滅尽多学男たちよ、実に、その賢者で成熟した善の調理人は、そしてまさに、衣類の利得のある者となり、給料の利得のある者となり、種々の褒美の利得のある者となる。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは同様に、その賢者で成熟した善の調理人は、自分自身の食事の兆候を獲得するからである。

一〇 向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様にここに、ある賢者で成熟した善の向煩悩滅尽多学男が、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去するならば、彼の身において身を観察してとどまるとき、心はサマディに入り、種々の煩悩を増長させるものは捨断され、

彼はその兆候を獲得する。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去するならば、彼の種々の感覚において感覚を観察してとどまるとき、心はサマディに入り、種々の煩悩を増長させるものは捨断され、彼はその兆候を獲得する。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去するならば、彼の心において心を観察してとどまるとき、心はサマディに入り、種々の煩悩を増長させるものは捨断され、彼はその兆候を獲得する。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去するならば、彼の種々の法則において法則を観察してとどまるとき、心はサマディに入り、種々の煩悩を増長させるものは捨断され、彼はその兆候を獲得する。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にその彼、賢者で成熟した善の向煩悩滅尽多学男は、そしてどうしても、まさに見られる法則において種々の楽の時を過ごすことの利得のある者となり、記憶修習と正智の利得のある者となる。これはどうしてか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは同様に、その賢者で成熟した善の向煩悩滅尽多学男は、自分自身の心の兆候を獲得するからである」と。

【九】第九　病人

一　このようにわたしは聞いた。

あるとき、世尊はヴェーサーリーのベールヴァ（ベルノキ）村にとどまっておられた。

二　そこで実に、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、君たちは行きなさい。ヴェーサーリーの全部で、友に従って、仲良しに従って、盟友に従って雨季の住居にこもりに行きなさい。まさにここベールヴァ村で、わたしは雨期の住居に達しよう」と。

「わかりました、尊師よ。」

と、実にその向煩悩滅尽多学男たちは世尊に承諾し申し上げ、ヴェーサーリーの全部で、友に従って、仲良しに従って、盟友に従って雨季の住居に達した。さて、世尊はまさしく同じベールヴァ村で雨期の住居に達されたのである。

三　直ちに、世尊が雨期の住居に達されたとき、激しい病気が生じ、終極の命を奪うほどの強烈な痛みが続けて起きた。その個所で、世尊は記憶修習し正智して、悩まされることなく我慢なさった。

四　直ちに、世尊にはこれがふと心に浮かんだ。

「その場合においては、わたしが介添人たちに呼びかけず、向煩悩滅尽多学男出家教団に注意を与えずに、完全煩悩破壊しようとするのは、わたしにとって適当

ではない。わたしはこの病気を精進によってはねのけ、生命の経験の構成に集中してとどまろう」と。

直ちに、世尊はその病気を精進によってはねのけ、生命の経験の構成に集中してとどまられた。

五　直ちに、世尊は病人から回復し、重病人の状態から回復して間もなく、修行場から出て、居住地の後ろの日陰にある用意された座にお座りになった。

六　直ちに、聖者アーナンダ（快楽）は世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼してそばに座った。そばに座った聖者アーナンダは、実に世尊にこう申し上げた。「良かった、尊師よ、快方に向かっておられます。良かった、尊師よ、世尊は生命の維持に耐えられたのです。尊師よ、世尊の重病人の状態によって、同一にわたしの身体はあたかも酔ったようになり、同様にわたしには種々の方角がはっきりせず、同様に種々の法則がわたしには頭に浮かびませんでした。尊師よ、その上わたしには、まさに何か勇気づけるのに十分なことがあったの

です。その場合には、世尊は完全煩悩破壊なさらないだろう。その場合には、世尊が向煩悩滅尽多学男出家教団に関して、まさに何でもかんでも遺言なさることはない」と。

七「アーナンダよ、今その場合においては、向煩悩滅尽多学男出家教団は、わたしに何を期待するんだ？　アーナンダよ、わたしによって指し示された法則は内部の者も外部の者も分け隔てず、アーナンダよ、真理勝者(しんりしょうしゃ)の種々の法則において、大師の握りこぶしがあることはない（すなわち、分け隔てなくすべてを説き明かす）。

アーナンダよ、あるいは『わたしは向煩悩滅尽多学男出家教団を引き受けよう』と、あるいは『向煩悩滅尽多学男出家教団はわたしの指示するものである』と、このようなものがあるならば、アーナンダよ、きっとわたしは向煩悩滅尽多学男出家教団に関して、まさに何でもかんでも遺言するだろう。アーナンダよ、実に真理勝者はこのようにならない。あるいは『わたしは向煩悩滅尽多学男出家教団

を引き受けよう』と、あるいは『向煩悩滅尽多学男出家教団はわたしの指示するものである』と。

アーナンダよ、どういう訳で、かの真理勝者は向煩悩滅尽多学男出家教団に関して、まさに何でもかんでも遺言するだろうか。

八 アーナンダよ、今その場合においては、わたしは老い、繁栄し、大老の歳月に達し、青年を体得し、わたしの八十歳は前進した。アーナンダよ、例として、老いた牛車が雑多な打撃を与えることによって行かせるように、アーナンダよ、全く同様に、確かに真理勝者の身は雑多な打撃を与えることによって行かせるのである。

九 アーナンダよ、真理勝者がすべての兆候を作意(さい)しないことにより、ある種々の感覚の滅尽により、無兆候の心のサマディを達成してとどまるとき、アーナンダよ、真理勝者の身はなおさら快適なのである。

アーナンダよ、だから、真我を灯明とし、真我を救いとし、自力を救いとして、

法則を灯明とし、法則を救いとし、自力を救いとしてとどまりなさい。
アーナンダよ、そしてどのように、向煩悩滅尽多学男は真我を灯明とし、真我を救いとし、自力を救いとして、法則を灯明とし、法則を救いとし、自力を救いとしてとどまるのだろうか。
一〇　アーナンダよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。
種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

アーナンダよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は真我を灯明とし、真我を救いとし、自力を救いとして、法則を灯明とし、法則を救いとし、自力を救いとしてとどまる。

一一　アーナンダよ、全く今やあるいはわたしの臨終において、真我を灯明とし、真我を救いとし、自力を救いとして、法則を灯明とし、法則を救いとし、自力を救いとしてとどまるであろうどんな人も、教えを懸命に試みる者たちはどんな人も、アーナンダよ、彼らは闇から離れて、わたしにより向煩悩滅尽多学男たちになるだろう」と。

【一〇】第十　向煩悩滅尽多学女が住んでいる

一　サーヴァッティ。

二　直ちに、聖者アーナンダは早朝、正装して、鉢と上衣を持って、ある向煩悩(こうぼんのう)

滅尽多学女（めつじんたがくにょ）の住まいの所に行った。行くと、用意された座に座った。

直ちに、多くの向煩悩滅尽多学女たちは、聖者アーナンダの所に行った。行くと、聖者アーナンダに敬礼してそばに座った。そばに座ったその向煩悩滅尽多学女たちは、実に聖者アーナンダにこう言った。

三「尊者アーナンダよ、ここに多くの向煩悩滅尽多学女たちは、四つの記憶修習の現象化において正しく確立した心によりとどまって、巨大な継承しない卓越を正智します」と。

「姉妹たちよ、これはそのとおりです。姉妹たちよ、これはそのとおりです。姉妹たちよ、というのは、四つの記憶修習の現象化において正しく確立した心によりとどまる向煩悩滅尽多学男やあるいは向煩悩滅尽多学女はどんな人も、巨大な継承しない卓越を正智する、これを彼女には望むことができるからです」と。

四　直ちに、聖者アーナンダは、その向煩悩滅尽多学女たちを法則の話によって、悟らせ、鼓舞し、目覚めさせ、誉め称えて、座から立って去った。

五　直ちに、聖者アーナンダはサーヴァッティにおいて施し物のために歩き回り、食事の後に、施し物のための巡回から戻り、世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼してそばに座った。そばに座った聖者アーナンダは、実に世尊にこう申し上げた。

「尊師よ、ここにわたしは早朝、正装し、鉢と上衣を持って、ある向煩悩滅尽多学女の住まいの所に行きました。行くと、用意された座に座りました。尊師よ、直ちに、多くの向煩悩滅尽多学女たちが、わたしの所に至りました。至ると、わたしに敬礼してそばに座りました。尊師よ、そばに座ったその向煩悩滅尽多学女たちは、実にわたしにこう言ったのです。

『尊者アーナンダよ、ここに多くの向煩悩滅尽多学女たちは、四つの記憶修習の現象化において正しく確立した心によりとどまって、巨大な継承しない卓越を正智します』と。

尊師よ、このように言われたとき、わたしはその向煩悩滅尽多学女たちにこう

言いました。

『姉妹たちよ、これはそのとおりです。姉妹たちよ、これはそのとおりです。姉妹たちよ、というのは、四つの記憶修習の現象化において正しく確立した心によりとどまる向煩悩滅尽多学男やあるいは向煩悩滅尽多学女はどんな人も、巨大な継承しない卓越を正智する、これを彼女には望むことができるからです』と。」

六「アーナンダよ、これはそのとおりだ。これはそのとおりだ。というのは、四つの記憶修習の現象化において正しく確立した心によりとどまる向煩悩滅尽多学男やあるいは向煩悩滅尽多学女はどんな人も、巨大な継承しない卓越を正智する、これを彼女には望むことができるからだ。四つとは何であろうか。

七　アーナンダよ、ここに向煩悩滅尽多学男が、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去するならば、彼の身において身を観察してとどまったとき、身の対象の固定、あるいは身における苦痛、あるいは心の退縮が生じ、あるいは外側に心が散らばる。

アーナンダよ、その向煩悩滅尽多学男によって、まさに浄信を生じさせる兆候の何でもかんでもにおいて、心は精神集中されなければならない。まさに浄信を生じさせる兆候の何でもかんでもにおいて、彼の心が精神集中したとき、歓喜が生まれ、歓喜があるとき喜が生まれ、意識が喜であることから身が静寂になり、身が静寂であって楽を経験し、楽あることから心はサマディに入る。彼はこのように弁別する。

『実にわたしが心に精神集中したために、その利益はわたしに実った。さあ今、わたしは削除しよう』と。

彼は削除し、そして熟考することなく、それのみならずそして吟味することなく、『わたしは無熟考無吟味であり、心の中に記憶修習を持って、心安らかである』と認識し理解する。

八　アーナンダよ、そしてまたさらに、種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去するなら

ば、彼の種々の感覚において感覚を観察してとどまったとき、感覚の対象の固定、あるいは身における苦痛、あるいは心の退縮が生じ、あるいは外側に心が散らばる。

アーナンダよ、その向煩悩滅尽多学男によって、まさに浄信を生じさせる兆候の何でもかんでもにおいて、心は精神集中されなければならない。まさに浄信を生じさせる兆候の何でもかんでもにおいて、彼の心が精神集中したとき、歓喜が生まれ、歓喜があるとき喜が生まれ、意識が喜であることから身が静寂になり、身が静寂であって楽を経験し、楽あることから心はサマディに入る。彼はこのように弁別する。

『実にわたしが心に精神集中したために、その利益はわたしに実った。さあ今、わたしは削除しよう』と。

彼は削除し、そして熟考することなく、それのみならずそして吟味することなく、『わたしは無熟考無吟味であり、心の中に記憶修習を持って、心安らかであ

る』と認識し理解する。

九　心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去するならば、彼の心において心を観察してとどまったとき、心の対象の固定、あるいは身における苦痛、あるいは心の退縮が生じ、あるいは外側に心が散らばる。

アーナンダよ、その向煩悩滅尽多学男によって、まさに浄信を生じさせる兆候の何でもかんでもにおいて、心は精神集中されなければならない。まさに浄信を生じさせる兆候の何でもかんでもにおいて、彼の心が精神集中したとき、歓喜が生まれ、歓喜があるとき喜が生まれ、意識が喜であることから身が静寂になり、身が静寂であって楽を経験し、楽あることから心はサマディに入る。彼はこのように弁別する。

『実にわたしが心に精神集中したために、その利益はわたしに実った。さあ今、わたしは削除しよう』と。

彼は削除し、そして熟考することなく、それのみならずそして吟味することなく、『わたしは無熟考無吟味であり、心の中に記憶修習を持って、心安らかである』と認識し理解する。

一〇　種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去するならば、彼の種々の法則において法則を観察してとどまったとき、法則の対象の固定、あるいは身における苦痛、あるいは心の退縮が生じ、あるいは外側に心が散らばる。

アーナンダよ、その向煩悩滅尽多学男によって、まさに浄信を生じさせる兆候の何でもかんでもにおいて、心は精神集中されなければならない。まさに浄信を生じさせる兆候の何でもかんでもにおいて、彼の心が精神集中したとき、歓喜が生まれ、歓喜があるとき喜が生まれ、意識が喜であることから身が静寂になり、身が静寂であって楽を経験し、楽あることから心はサマディに入る。彼はこのように弁別する。

『実にわたしが心に精神集中したために、その利益はわたしに実った。さあ今、わたしは削除しよう』と。

彼は削除し、そして熟考することなく、それのみならずそして吟味することなく、『わたしは無熟考無吟味であり、心の中に記憶修習を持って、心安らかである』と認識し理解する。

一一 アーナンダよ、実にこのように精神集中して、修習が存在するのである。

一二 アーナンダよ、そして、どのように精神集中しないで、修習が存在するのだろうか。

一三 アーナンダよ、向煩悩滅尽多学男は、外側に心に精神集中しないで、『わたしの心は外側に精神集中しなかった』と認識し理解する。それで、前後に閉じ込められたことなく離解脱したことを、『精神集中しなかった』と認識し理解する。これに反して、『身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、心安らかである』と認識し理解する。

一四　アーナンダよ、向煩悩滅尽多学男は、外側に心に精神集中しないで、『わたしの心は外側に精神集中しなかった』と認識し理解する。それで、前後に閉じ込められたことなく離解脱したことを、『精神集中しなかった』と認識し理解する。これに反して、『種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、心安らかである』と認識し理解する。

一五　アーナンダよ、向煩悩滅尽多学男は、外側に心に精神集中しないで、『わたしの心は外側に精神集中しなかった』と認識し理解する。それで、前後に閉じ込められたことなく離解脱したことを、『精神集中しなかった』と認識し理解する。これに反して、『心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、心安らかである』と認識し理解する。

一六　アーナンダよ、向煩悩滅尽多学男は、外側に心に精神集中しないで、『わたしの心は外側に精神集中しなかった』と認識し理解する。それで、前後に閉じ込められたことなく離解脱したことを、『精神集中しなかった』と認識し理解す

る。これに反して、『種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、心安らかである』と認識し理解する。

一七　アーナンダよ、実にこのように精神集中しないで、修習が存在するのである。

一八　アーナンダよ、このように、実にわたしによって、精神集中して修習が指し示され、精神集中しないで修習が指し示された。

アーナンダよ、多学の弟子たちの幸福を願っている慈悲のある慈悲に応じて、尊師がなすべきことを、わたしは君たちになしたのだ。アーナンダよ、これらの樹下、これらの人けのない所を探し求めなさい。アーナンダよ、怠惰にならないように願う。後から深く後悔しないように願う。これが君たちに対してわたしたちが諭すことである」と。

一九　世尊はこれを演説なさった。大喜びした聖者アーナンダは、世尊のお説きになったことに喜びを見いだしたと。

そこでの経群

第一　アンバパーリ品

アンバパーリ、記憶修習、向煩悩滅尽多学男、
矢印と善の積み重ねた山、
鷹族、猿、調理人、
病人、向煩悩滅尽多学女が住んでいると。

第二　ナーランダー品

【一二】第一　偉大なる男性

一　サーヴァッティの地にて。

二　直ちに、聖者サーリプッタ（次に来る息子）は世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼してそばに座った。そばに座った聖者サーリプッタは、実に世尊にこう申し上げた。

三　「尊師よ、偉大なる男性、偉大なる男性とおっしゃられますが、尊師よ、いったいどのくらいの範囲まで偉大なる男性になるのでしょうか」と。

「サーリプッタよ、実にわたしは、離解脱した心の状態から偉大なる男性と断言するのであり、離解脱した心の状態がないことから全く偉大なる男性ではないと断言するのである。サーリプッタよ、そして、離解脱した心とはどんなものであろうか。

四　サーリプッタよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。彼が身において身を観察してとどまるとき、心はとらわれがなく、種々の漏から離愛著（りあいじゃく）し離解脱する。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。彼が種々の感覚において感覚を観察してとどまるとき、心はとらわれがなく、種々の漏から離愛著し離解脱する。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。彼が心において心を観察してとどまるとき、心はとらわれがなく、種々の漏から離愛著し離解脱する。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。彼が種々の法則において法則を観察してとどまるとき、心はとらわれがなく、種々の漏から離愛著し離解脱する。

五　サーリプッタよ、このように実に、離解脱した心がある。サーリプッタよ、実にわたしは、離解脱した心の状態から偉大なる男性と断言するのであり、離解脱した心の状態がないことから全く偉大なる男性ではないと断言するのである」と。

【一二】第二　ナーランダーに

一　あるとき、世尊はナーランダー（これで十分だということなく与える）のパーヴァーリカ（マントの人）のマンゴー林にとどまっておられた。

二　直ちに、聖者サーリプッタは世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼してそばに座った。そばに座った聖者サーリプッタは、実に世尊にこう申し上げた。

三「尊師よ、すなわち正覚（しょうかく）において、世尊よりさらに多くなおさら証智している他の出家修行者やあるいは祭司が、そして存在したことはなく、そして存在するであろうことはなく、そして今存在することはありません。このように、わた

しは世尊に対して浄信があるのです」と。

「サーリプッタよ、実に君によって、この巨大で荘厳な言葉が話され、明白さに捕らえられた獅子吼がほえられた。

『尊師よ、すなわち正覚において、世尊よりさらに多くなおさら証智している他の出家修行者やあるいは祭司が、そして存在したことはなく、そして存在するであろうことはなく、そして今存在することはありません。このように、わたしは世尊に対して浄信があるのです』と。

四　サーリプッタよ、じゃあどういう訳で、君は、過去の遍歴で供養値魂・最上正覚者であられた、かのすべての世尊方の心を心によって把握し知ったのか。あるいは『かの世尊方にはこのように種々の戒があった』と、あるいは『かの世尊方にはこのように種々の法則があった』と、あるいは『かの世尊方にはこのように智慧があった』と、あるいは『かの世尊方はこのように時を過ごされた』と、あるいは『かの世尊方はこのように離解脱なさった』と。」

「尊師よ、そのようなことはありません」と。

五 「サーリプッタよ、ところでどういう訳で、君は、未来の遍歴で供養値魂・最上正覚者であられるであろう、かのすべての世尊方の心を心によって把握し知ったのか。あるいは『かの世尊方にはこのように種々の戒があるだろう』と、あるいは『かの世尊方にはこのように種々の法則があるだろう』と、あるいは『かの世尊方にはこのように智慧があるだろう』と、あるいは『かの世尊方はこのように時を過ごされるだろう』と、あるいは『かの世尊方はこのように離解脱なさるだろう』と。」

「尊師よ、そのようなことはありません」と。

六 「サーリプッタよ、ところでどういう訳で、君は、今供養値魂・最上正覚者であるわたしの心を心によって把握し知ったのか。あるいは『世尊にはこのように戒がある』と、あるいは『世尊にはこのように法則がある』と、あるいは『世尊にはこのように智慧がある』と、あるいは『世尊はこのように時を過ごす』と、

あるいは『世尊はこのように離解脱する』と。」

「尊師よ、そのようなことはありません」と。

七　「サーリプッタよ、そして、ここで君には、過去・未来・現在の供養値魂・最上正覚者方に対して他心精通（たしんせいつう）があることはない。サーリプッタよ、それならそれで、どういう訳で君によって、巨大で荘厳な言葉が話され、明白さに捕らえられた獅子吼がほえられたのか。

『尊師よ、すなわち正覚において、世尊よりさらに多くなおさら証智している他の出家修行者やあるいは祭司が、そして存在したことはなく、そして存在するであろうことはなく、そして今存在することはありません。このように、わたしは世尊に対して浄信があるのです』と。」

「尊師よ、実にわたしには、過去・未来・現在の供養値魂・最上正覚者方に対して、その他心精通があることはありません。それにもかかわらず、法則の結論が知られたのです。

八　尊師よ、例として、国王の国境の城塞があり、堅固な城壁、堅固な城門、ただ一つの門があり、そこで賢者で成熟した頭の良い門衛が、わかっていない者たちに対しては防止し、わかっている者たちに対しては入れる者であるようなものです。彼がその城塞全部を囲んでいる道を進みながら、城壁のひびや城壁の裂け目や真実猫がはっていくほどでさえも見ることがないとすると、その結果として、このように現われるでしょう。

『実にこの城塞にあるいは入り、あるいは出る粗大な生き物の群れはどんなものもすべて、まさにこの門によってあるいは入り、あるいは出る』と。

尊師よ、全く同様に、わたしによって法則の結論が知られたのです。

九　尊師よ、同様に、過去の遍歴で供養値魂・最上正覚者であられた、すべての世尊方は、心の煩悩を増長させるものであり智慧を弱める五つの障害を捨断し、四つの記憶修習の現象化において正しく確立した心になり、七つの覚醒段階を如実に修習し、無上の最上正覚を現正覚（げんしょうかく）なさったのです。

尊師よ、同様に、未来の遍歴で供養値魂・最上正覚者であられるであろう、すべての世尊方は、心の煩悩を増長させるものであり智慧を弱める五つの障害を捨断し、四つの記憶修習の現象化において正しく確立した心になり、七つの覚醒段階を如実に修習し、無上の最上正覚を現正覚なさるでしょう。

尊師よ、同様に今、供養値魂・最上正覚者であられる世尊は、心の煩悩を増長させるものであり智慧を弱める五つの障害を捨断し、四つの記憶修習の現象化において正しく確立した心になり、七つの覚醒段階を如実に修習し、無上の最上正覚を現正覚なさっています。」

一〇「素晴らしいことだ、素晴らしいことだ、サーリプッタよ。サーリプッタよ、だから、君はこの法則の要点を、しばしば向煩悩滅尽多学男たち、向煩悩滅尽多学女たち、帰依信男(きえしんなん)たち、帰依信女(きえしんにょ)たちに説きなさい。サーリプッタよ、全く同様に、真理勝者に対して、不信やあるいは疑惑があるに違いない真理の法則の実践と無縁な男たちにとっても、わたしの法則の要点を聞くならば、真理勝者

に対して、不信やあるいは疑惑がある者たちが捨断されるだろう」と。

【一三】第三　チュンダ

一　あるとき、世尊はサーヴァッティのジェータ林にあるアナータピンディカの大庭園にとどまっておられた。

二　ところでそのとき、聖者サーリプッタは、マガダ（太陽の祭司のいる）国のナーラ（中空の茎）村にとどまり、病気で、苦しみ、重病であった。そして、チュンダ（象牙を加工する芸術家）は初学者であり、聖者サーリプッタの介添人であった。

三　それで、聖者サーリプッタは、その病気によって完全煩悩破壊したのである。

四　直ちに、チュンダ初学者は、聖者サーリプッタの鉢と上衣を持って、サーヴァッティのジェータ林にあるアナータピンディカの大庭園の聖者アーナンダの所に行っ

た。行くと、聖者アーナンダに敬礼してそばに座った。そばに座ったチュンダ初学者は、実に聖者アーナンダにこう言った。

「尊者よ、聖者サーリプッタは完全煩悩破壊されました。これが、彼の鉢と上衣です」と。

五　「友チュンダよ、これは実に、世尊にお会いするための講演の主題です。友チュンダよ、早く、世尊の所に行きましょう。行って、世尊にこの意義をお告げしましょう」と。

「わかりました、尊者よ。」

と、実にチュンダ初学者は聖者アーナンダに承諾した。

六　直ちに、聖者アーナンダとチュンダ初学者は、世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼してそばに座った。そばに座った聖者アーナンダは、実に世尊にこう申し上げた。

「尊師よ、このチュンダ初学者がこのように言いました。

『尊者よ、聖者サーリプッタは完全煩悩破壊されました。これがその鉢と上衣です』と。

尊師よ、聖者サーリプッタが完全煩悩破壊したと聞いて、その上わたしの身体はあたかも酔ったようになり、同様にわたしには種々の方角がはっきりせず、同様に種々の法則がわたしには頭に浮かびませんでした」と。

七「アーナンダよ、じゃあサーリプッタは、君からあるいは戒の集積を持って完全煩悩破壊したのか。あるいはサマディの集積を持って完全煩悩破壊したのか。あるいは智慧の集積を持って完全煩悩破壊したのか。あるいは離解脱の集積を持って完全煩悩破壊したのか。あるいは離解脱精通見解の集積を持って完全煩悩破壊したのか」と。

「尊師よ、そして実に、聖者サーリプッタは、わたしからあるいはその戒の集積を持って完全煩悩破壊したのではありません。あるいはサマディの集積を持って完全煩悩破壊したのではありません。あるいは智慧の集積を持って完全煩悩破壊

したのではありません。あるいは離解脱の集積を持って完全煩悩破壊したのではありません。あるいは離解脱精通見解の集積を持って完全煩悩破壊したのではありません。

尊師よ、その上、聖者サーリプッタはわたしに対して忠告し、近づき、識別させ、悟らせ、鼓舞し、目覚めさせ、うれしがらせたのであり、法則を説くことにおいて無尽蔵であり、神聖行を有している人たちの手助けとなりました。わたしたちは、聖者サーリプッタのその法則の精髄、法則の楽しみ、法則の手助けを思い出します」と。

八　「アーナンダよ、わたしによって、あらかじめまさにそれが言明されたはずではないか。

『すべての親愛で愉快なものとは、別のものであり、離脱であり、その他の本性である。』

アーナンダよ、いかにしてここでそれを得ることができようか。『生じ存在し

集積したその崩壊の法則が、本当に崩壊しないように願う』と、この道理は存在しない。
九　アーナンダよ、例として、最優良である大きな樹木がとどまって、より大きい幹が崩壊するようなものであり、アーナンダよ、全く同様に、最優良である大向煩悩滅尽多学男出家教団がとどまって、サーリプッタは完全煩悩破壊したのである。
アーナンダよ、いかにしてここでそれを得ることができようか。『生じ存在し集積したその崩壊の法則が、本当に崩壊しないように願う』と、この道理は存在しない。
一〇　アーナンダよ、だから、真我を灯明とし、真我を救いとし、自力を救いとして、法則を灯明とし、法則を救いとし、自力を救いとしてとどまりなさい。アーナンダよ、そして、どのように向煩悩滅尽多学男は真我を灯明とし、真我を救いとし、自力を救いとして、法則を灯明とし、法則を救いとし、自力を救いとして

とどまるのであろうか。

一一　アーナンダよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

アーナンダよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は真我を灯明とし、真我を救いとし、自力を救いとして、法則を灯明とし、法則を救いとし、自力を救いとしてとどまるのである。

一二　アーナンダよ、全く今やあるいはわたしの臨終において、真我を灯明とし、真我を救いとし、自力を救いとして、法則を灯明とし、法則を救いとし、自力を救いとしてとどまるであろうどんな人も、教えを懸命に試みる者たちはどんな人も、アーナンダよ、彼らは闇から離れて、わたしにより向煩悩滅尽多学男たちになるだろう」と。

【一四】第四　チェーラ

一　あるとき、サーリプッタとモッガラーナ（乗り物の軌道）が完全煩悩破壊して間もなく、世尊はヴァッジ（敬遠される）国のウッカチェーラー（布地のたいまつ）のガンガー（大変速い河）河の岸に、大向煩悩滅尽多学男出家教団と一緒にとどまっておられた。

二　ところでそのとき、世尊は向煩悩滅尽多学男出家教団に取り囲まれて、到着

した場所で座っておられた。直ちに、世尊は黙って向煩悩滅尽多学男出家教団を見回し、向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

三「向煩悩滅尽多学男たちよ、同一にわたしにはこの集団があたかも空であるように見える。向煩悩滅尽多学男たちよ、サーリプッタとモッガラーナが完全煩悩破壊したことによって、集団はわたしにとって空である。サーリプッタとモッガラーナがとどまっている方角に配慮はない。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く過去の遍歴で、かの供養値魂・最上正覚者であられた世尊方にも、まさにこの最も優れた二人の多学の弟子が存在した。例として、わたしにとってのサーリプッタとモッガラーナのようなものだ。

向煩悩滅尽多学男たちよ、同様に未来の遍歴で、かの供養値魂・最上正覚者であられるであろう世尊方にも、まさにこの最も優れた二人の弟子が存在するだろう。例として、わたしにとってのサーリプッタとモッガラーナのようなものだ。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、多学の弟子たちにとって素晴らしいことだ。向煩

悩滅尽多学男たちよ、多学の弟子たちにとって格別なことだ。そしてまさしく、尊師の救済計画をもたらす者たちは、忠告をなすに違いなく、そして、親愛で愉快でそして修習されるべき四つの集団の教師たちに違いない。

向煩悩滅尽多学男たちよ、真理勝者にとって素晴らしいことだ。向煩悩滅尽多学男たちよ、真理勝者にとって格別なことだ。このような二人の多学の弟子が完全煩悩破壊したとき、まさしく同様に、真理勝者には不運な出来事や悲嘆があることはない。

向煩悩滅尽多学男たちよ、いかにしてここでそれを得ることができようか。『生じ存在し集積したその崩壊の法則が、本当に崩壊しないように願う』と、この道理は存在しない。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、最優良である大きな樹木がとどまって、より大きい種々の幹が崩壊するようなものであり、向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、最優良である大向煩悩滅尽多学男出家教団がとどまって、サーリプッ

タとモッガラーナは完全煩悩破壊したのである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、いかにしてここでそれを得ることができようか。『生じ存在し集積したその崩壊の法則が、本当に崩壊しないように願う』と、この道理は存在しない。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、真我を灯明とし、真我を救いとし、自力を救いとして、法則を灯明とし、法則を救いとし、自力を救いとしてとどまりなさい。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どのように向煩悩滅尽多学男は真我を灯明とし、真我を救いとし、自力を救いとして、法則を灯明とし、法則を救いとし、自力を救いとしてとどまるのであろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は真我を灯明とし、真我を救いとし、自力を救いとして、法則を灯明とし、法則を救いとし、自力を救いとしてとどまるのである。
九　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く今やあるいはわたしの臨終において、真我を灯明とし、真我を救いとし、自力を救いとして、法則を灯明とし、法則を救いとし、自力を救いとしてとどまるであろうどんな人も、教えを懸命に試みる者たちはどんな人も、向煩悩滅尽多学男たちよ、闇から離れて向煩悩滅尽多学男になるだろう」と。

【一五】第五　バーヒヤ、あるいはバーヒカ

一　サーヴァッティの地にて。

二　直ちに、聖者バーヒヤ（外国の性質）は世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼してそばに座った。そばに座った聖者バーヒヤは、実に世尊にこう申し上げた。

「尊師よ、どうかわたしのために、要するに法則を指し示してください。わたしは世尊の法則を聴き、一人で隠遁し、怠惰でなく、熱心に、不屈の意志を持ってとどまることができます」と。

「バーヒヤよ、だから、君はどうしても最初に、種々の善の法則において清浄にさせなさい。そして、最初の種々の善の法則には何があるか。正しく清浄な戒と誠実な見解とがある。

三　バーヒヤよ、そして実に、君に正しく清浄な戒と誠実な見解とが生じるであろうときから、バーヒヤよ、君は戒によって戒を確立して、四つの記憶修習の現

象化を修習しなさい。四つとは何であろうか。

四　バーヒヤよ、ここに君は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

バーヒヤよ、実に、君が戒によって戒を確立して、これら四つの記憶修習の現象化をこのように修習するときから、バーヒヤよ、君には、あるいは夜あるいは日中に移っても、まさに種々の善の法則において発達が望まれ、衰退は全く望まれることがない」と。

五　直ちに、聖者バーヒヤは、世尊のお説きになったことに喜びを見いだし、感謝して、座から立って、世尊に敬礼し、右回りの礼をして去ったのである。

六　直ちに、聖者バーヒヤは一人で隠遁し、怠惰でなく、熱心に、不屈の意志を持ってとどまり、程なくして、その利益のために、良家の息子たちがまさに完全に家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送る、その無上の神聖行の完達を、まさに見られる法則において、自ら証智し現証し達成してとどまった。「生は破壊され、神聖行は果たされ、なすべきことはなされ、引き続いてこの世に存在することの結果を得ることはない」と証智した。

七　そしてしたがって、聖者バーヒヤは供養値魂たちのある者になったのであると。

【一六】第六　ウッティヤ

一　サーヴァッティの地にて。

二　直ちに、聖者ウッティヤ（説法者）は世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼してそばに座った。そばに座った聖者ウッティヤは、実に世尊にこう申し上げた。

「尊師よ、どうかわたしのために、要するに法則を指し示してください。わたしは世尊の法則を聴き、一人で隠遁し、怠惰でなく、熱心に、不屈の意志を持ってとどまることができます」と。

「ウッティヤよ、だから、君はどうしても最初に、種々の善の法則において清浄にさせなさい。そして、最初の種々の善の法則には何があるか。正しく清浄な戒と誠実な見解とがある。

三　ウッティヤよ、そして実に、君に正しく清浄な戒と誠実な見解とが生じるであろうときから、ウッティヤよ、君は戒によって戒を確立して、四つの記憶修習の現象化を修習しなさい。四つとは何であろうか。

四　ウッティヤよ、ここに君は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智

し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
ウッティヤよ、実に、君が戒によって戒を確立して、これら四つの記憶修習の現象化をこのように修習するときから、ウッティヤよ、君は死の神の領域のかの岸に至るだろう」と。

五　直ちに、聖者ウッティヤは、世尊のお説きになったことに喜びを見いだし、感謝して、座から立って、世尊に敬礼し、右回りの礼をして去ったのである。

六　直ちに、聖者ウッティヤは一人で隠遁し、怠惰でなく、熱心に、不屈の意志

を持ってとどまり、程なくして、その利益のために、良家の息子たちがまさに完全に家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送る、その無上の神聖行の完達を、まさに見られる法則において、自ら証智し現証し達成してとどまった。「生は破壊され、神聖行は果たされ、なすべきことはなされ、引き続いてこの世に存在することの結果を得ることはない」と証智した。

七　そしてしたがって、聖者ウッティヤは供養値魂たちのある者になったのであると。

【一七】第七　聖なるもの

一　サーヴァッティ。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、修習され、真面目に行なわれたこれら四つの記憶修習の現象化は、聖なるものであり、輪廻（りんね）から脱却させ、それをなす者は完全

な苦しみの破壊に導かれるのである。四つとは何であろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、実に、修習され、真面目に行なわれたこれら四つの記憶修習の現象化は、聖なるものであり、輪廻から脱却させ、それをなす者は完全な苦しみの破壊に導かれるのである」と。

【一八】第八　神聖天

一　あるとき、世尊はウルヴェーラー（広い海岸）のネーランジャラー（罪のない川）河の岸のヤギ飼いのバンヤンジュにとどまり、第一の現正覚をなさった。

二　直ちに、世尊が人里離れた所で独居していると、このように心に考えが生じた。「このただ一つの軌道の道は、種々の生命体の清浄のためであり、種々の不運な出来事と悲嘆に対して自由になるためであり、種々の苦しみと落胆の全滅のためであり、正しい体系の習得のためであり、煩悩破壊の現証のためである。すなわち、四つの記憶修習の現象化である。四つとは何であろうか。

三　向煩悩滅尽多学男は、あるいは身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

向煩悩滅尽多学男は、あるいは種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

向煩悩滅尽多学男は、あるいは心において心を観察してとどまり、熱心に正智

し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。
向煩悩滅尽多学男は、あるいは種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。
このただ一つの軌道の道は、種々の生命体の清浄のためであり、種々の不運な出来事と悲嘆に対して自由になるためであり、種々の苦しみと落胆の全滅のためであり、正しい体系の習得のためであり、煩悩破壊の現証のためである。すなわち、四つの記憶修習の現象化である」と。
四 直ちに、永続世界の支配者である神聖天は、世尊の心の考えを心によって認識し、例として、力のある男があるいは曲げた腕を伸ばし、あるいは伸ばした腕を曲げるような、まさにこのように、実に神聖天の世界で消滅し、世尊の前方に生じた。直ちに、永続世界の支配者である神聖天は、一方の肩に上布(うわぬの)をかけて、世尊に対して差し伸ばした手を前に曲げて合掌して、世尊にこう演説し申し上げた。

五　「世尊よ、これはそのとおりです。最上善逝よ、これはそのとおりです。尊師よ、このただ一つの軌道の道は、種々の生命体の清浄のためであり、種々の不運な出来事と悲嘆に対して自由になるためであり、種々の苦しみと落胆の全滅のためであり、正しい体系の習得のためであり、煩悩破壊の現証のためです。すなわち、四つの記憶修習の現象化です。四つとは何でしょうか。

尊師よ、向煩悩滅尽多学男は、あるいは身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

尊師よ、向煩悩滅尽多学男は、あるいは種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

尊師よ、向煩悩滅尽多学男は、あるいは心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

尊師よ、あるいは種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し

記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。
尊師よ、このただ一つの軌道の道は、種々の生命体の清浄のためであり、種々の不運な出来事と悲嘆に対して自由になるためであり、種々の苦しみと落胆の全滅のためであり、正しい体系の習得のためであり、煩悩破壊の現証のためです。すなわち、四つの記憶修習の現象化です」と。
六　永続世界の支配者である神聖天は、これを演説し申し上げた。これを演説した後、永続世界の支配者である神聖天は、そしてその上こう演説し申し上げた。

「出生の破壊と終極を見る者は、
ただ一つの軌道の道を認識し理解し、
祝福と慈悲がある。
そして、氾濫（はんらん）を渡る者たちは、
この道によって、

以前に渡ったのであり、
渡るであろう」と。

【一九】第九　セーダカ、あるいはエーカンタカ（完全な性質）

一　あるとき、世尊はスンバ（押し進め）国にあるセーダカ（汗をかく町）という名前のスンバ国の町にとどまっておられた。

二　そこで実に、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ、その昔、竹と鉄ボールの曲芸をする者が鉄ボールの曲芸のための竹を建てて、弟子のメーダカターリカー（小さい鉢の中の脂肪）に呼びかけた。

『来なさい、君、メーダカターリカーよ、君は鉄ボールの曲芸のための竹に乗って、わたしの肩の最上部にとどまりなさい』と。

『わかりました、大師よ。』
と、向煩悩滅尽多学男たちよ、実に弟子のメーダカターリカーは竹と鉄ボールの曲芸をする者に承諾し、鉄ボールの曲芸のための竹に乗って、大師の肩の最上部にとどまったのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、直ちに、竹と鉄ボールの曲芸をする者は、弟子のメーダカターリカーにこう言った。
『君、メーダカターリカーよ、君はわたしを守りなさい。わたしは君を守ろう。このようにわたしたちは、お互いに保護し、お互いに守り、種々の技芸を見せて、それのみならずそして利得を得て、それのみならずそして安全に鉄ボールの曲芸のための竹を降りよう』と。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、このように言われたとき、弟子のメーダカターリカーは竹と鉄ボールの曲芸をする者にこう言った。
『大師よ、その場合においては、これはそのとおりではないでしょう。大師よ、

あなたは自分自身をお守りください。わたしは自分自身を守ります。わたしたちはこのように、自分自身を保護し、自分自身を守り、技芸を見せて、それのみならずそして利得を得て、それのみならずそして安全に鉄ボールの曲芸のための竹を降りましょう』と。

それがそこで正しい体系なのである」と。

五　弟子のメーダカターリカーが、大師に言ったように、世尊は演説なさった。「向煩悩滅尽多学男たちよ、『わたしは自分自身を守ろう』と、記憶修習の現象化は用いられるべきである。『わたしたちは他人を守ろう』と、記憶修習の現象化は用いられるべきである。向煩悩滅尽多学男たちよ、自分自身を守りながら他人を守り、他人を守りながら自分自身を守るのである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、そしてどのように、自分自身を守りながら他人を守るのであろうか。熟練によるのであり、修習によるのであり、真面目に行なうことによるのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、自分自身を守

りながら他人を守るのである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、そしてどのように、他人を守りながら自分自身を守るのであろうか。忍辱によるのであり、非残酷によるのであり、聖慈愛の状態によるのであり、哀れみの状態によるのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、他人を守りながら自分自身を守るのである。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、『わたしは自分自身を守ろう』と、記憶修習の現象化は用いられるべきである。『わたしたちは他人を守ろう』と、記憶修習の現象化は用いられるべきである。向煩悩滅尽多学男たちよ、自分自身を守りながら他人を守り、他人を守りながら自分自身を守るのである」と。

【二〇】第十　大陸、あるいはエーカンタカ

一　このようにわたしは聞いた。

あるとき、世尊はスンバ国にあるセーダカという名前のスンバ国の町にとどまっておられた。

二　そこで実に、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。

「向煩悩滅尽多学男たちよ」と。

「尊師よ。」

と、その向煩悩滅尽多学男たちは、世尊に承諾し申し上げた。世尊はこう演説なさった。

三「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、大陸一番の素晴らしい女（ひと）がいて、向煩悩滅尽多学男たちよ、大陸一番の素晴らしい女（ひと）であると、実に多くの人々の集まりが集まり、その場合においては、その大陸一番の素晴らしい女（ひと）は、舞踏において最も優れたものを生み、歌において最も優れたものを生むことがあり、向煩悩滅尽多学男たちよ、大陸一番の素晴らしい女（ひと）が舞踏し祝って歌うと、実に非常に多くの人々の集まりが集まるようなものである。

それで、生きようとし、死のうとせず、楽を懸命に試み、苦しみを厭逆（えんぎゃく）する男が近づいて、すぐにこのように話しかけるとする。

『いいかい、男よ。お前は大祝祭の集会と大陸一番の素晴らしい女（ひと）との間で、このふちまでいっぱいの油の鉢を引き受けなさい。そして、剣を取り上げた男が、お前のちょうどすぐ後について従い、まさにわずかでもそれを捨てるまさしく同じ場所で、お前の頭を落とすだろう』と。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。じゃあ同一に、その男はまさにその油の鉢を作意することなく、外側に怠惰をもたらすだろうか」と。

「尊師よ、そのようなことはありません」と。

四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、わたしによってなされたこのたとえ話は、実に利益を識別させるためのものである。そしてここで、これが利益なのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、ふちまでいっぱいの油の鉢とは、実にこれは身体に及んだ記憶修習の象徴物である。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、だから、このように学ぶべきである。
『今、身体に及んだ記憶修習を修習し、真面目に行ない、進めることを行ない、骨子を行ない、経験し、綿密に検討し、よく着手しよう』と。
向煩悩滅尽多学男たちよ、全く、君たちはこのように学ぶべきである」と。

第二　ナーランダー品

その経群

偉大なる男性、ナーランダーに、
チュンダ、身に着けている衣服とバーヒヤ、
ウッティヤ、聖なるもの、神聖天、
セーダカと大陸によってと。

第三　戒と継続品

【三二】第一　戒

一　このようにわたしは聞いた。
あるとき、聖者アーナンダと聖者バッダ（尊者）は、パータリプッタ（らっぱ状の花の息子）のクックタ（鶏）の大庭園にとどまっていた。

二　直ちに、聖者バッダは夕刻に独居から立ち上がり、聖者アーナンダの所に行った。行くと、聖者アーナンダとお互いに親しいあいさつを交わし、友情のこもった丁寧な談話を交わして、そばに座った。そばに座った聖者バッダは、実に聖者アーナンダにこう言った。

三「友アーナンダよ、世尊によって演説されたこれらの善の戒は、何の目的のために、世尊によって演説されたのであろうか」と。
「素晴らしいことだ、素晴らしいことだ、友バッダよ。友バッダよ、実にあなた

の遠回しの道は高貴な至福を得る。会得は高貴な至福を得る。尋ね方は素晴らしい。

友バッダよ、というのは、このようにあなたは質問したからである。

『友アーナンダよ、世尊によって演説されたこれらの善の戒は、何の目的のために、世尊によって演説されたのであろうか』と。」

「わかりました、友よ」と。

四 「友バッダよ、世尊によって演説されたこれらの善の戒は、極限に四つの記憶修習の現象化を修習するために、世尊によって演説されたのである。四つとは何であろうか。

五 友よ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。
友バッダよ、世尊によって演説されたこれらの善の戒は、極限に四つの記憶修習の現象化を修習するために、世尊によって演説されたのである」と。

【三二】第二　継続

一　まさにその地にて。
二　そばに座った聖者バッダは、実に聖者アーナンダにこう言った。
三「友アーナンダよ、いったい真理勝者が完全煩悩破壊なさった後、絶対の真理の法則が長くとどまらない原因は何であり、条件は何であろうか。友よ、とこ

ろで、真理勝者が完全煩悩破壊なさった後、絶対の真理の法則が長くとどまる原因は何であり、条件は何であろうか」と。

「素晴らしいことだ、素晴らしいことだ、友バッダよ。友バッダよ、実にあなたの遠回しの道は高貴な至福を得る。会得は高貴な至福を得る。尋ね方は素晴らしい。

友バッダよ、というのは、このようにあなたは質問したからである。

『友アーナンダよ、いったい真理勝者が完全煩悩破壊なさった後、絶対の真理の法則が長くとどまらない原因は何であり、条件は何であろうか。友アーナンダよ、ところで、真理勝者が完全煩悩破壊なさった後、絶対の真理の法則が長くとどまる原因は何であり、条件は何であろうか』と。」

「わかりました、友よ」と。

四 「友よ、実に、四つの記憶修習の現象化の修習されない状態により、真面目に行なわれない状態により、真理勝者が完全煩悩破壊なさった後、絶対の真理の

法則は長くとどまらないのである。友よ、そして実に、四つの記憶修習の現象化の修習された状態により、真面目に行なわれた状態により、真理勝者が完全煩悩破壊なさった後、絶対の真理の法則は長くとどまるのである。四つとは何であろうか。

五　友よ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

友よ、実に、これら四つの記憶修習の現象化の修習されない状態により、真面

目に行なわれない状態により、真理勝者が完全煩悩破壊なさった後、絶対の真理の法則は長くとどまらないのである。友よ、そして実に、これら四つの記憶修習の現象化の修習された状態により、真面目に行なわれた状態により、真理勝者が完全煩悩破壊なさった後、絶対の真理の法則は長くとどまるのである」と。

【二三】第三　衰退

一―二　パータリプッタのクックタの大庭園にとどまっていた。

三「友アーナンダよ、いったい絶対の真理の法則の衰退がある原因は何であり、条件は何であろうか。友アーナンダよ、いったい絶対の真理の法則の衰退がない原因は何であり、条件は何であろうか」と。

「素晴らしいことだ、素晴らしいことだ、友バッダよ。友バッダよ、実にあなたの遠回しの道は高貴な至福を得る。会得は高貴な至福を得る。尋ね方は素晴らし

い。

友バッダよ、というのは、このようにあなたは質問したからである。

『友よ、じゃあ、絶対の真理の法則の衰退がある原因は何であり、条件は何であろうか。友アーナンダよ、ところで、絶対の真理の法則の衰退がない原因は何であり、条件は何であろうか』と。」

「わかりました、友よ」と。

四「友よ、実に、四つの記憶修習の現象化の修習されない状態により、真面目に行なわれない状態により、絶対の真理の法則の衰退がある。友よ、そして実に、四つの記憶修習の現象化の修習された状態により、真面目に行なわれた状態により、絶対の真理の法則の衰退がないのである。四つとは何であろうか。

五　友よ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去すべきである。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

友よ、実に、これら四つの記憶修習の現象化の修習されない状態により、真面目に行なわれない状態により、絶対の真理の法則の衰退がある。友よ、実に、これら四つの記憶修習の現象化の修習された状態により、真面目に行なわれた状態により、絶対の真理の法則の衰退がないのである」と。

【二四】第四　取るに足らないもの

一　サーヴァッティの地にて。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの記憶修習の現象化がある。四つとは何であろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが四つの記憶修習の現象化である」と。

【二五】第五　祭司

一　このようにわたしは聞いた。
あるとき、世尊はサーヴァッティのジェータ林にあるアナータピンディカの大庭園にとどまっておられた。

二　直ちに、ある祭司は世尊の所に行った。行くと、世尊とお互いに親しいあいさつを交わし、友情のこもった丁寧な談話を交わして、そばに座った。そばに座ったその祭司は、実に世尊にこう申し上げた。

三「友ゴータマ（牛王）よ、いったい真理勝者が完全煩悩破壊なさった後、絶対の真理の法則が長くとどまらない原因は何であり、条件は何でしょうか。友ゴータマよ、ところで、真理勝者が完全煩悩破壊なさった後、絶対の真理の法則が長くとどまる原因は何であり、条件は何でしょうか」と。

四「祭司よ、実に、四つの記憶修習の現象化の修習されない状態により、真面目に行なわれない状態により、真理勝者が完全煩悩破壊なさった後、絶対の真理

の法則は長くとどまらないのである。友よ、そして実に、四つの記憶修習の現象化の修習された状態により、真面目に行なわれた状態により、真理勝者が完全煩悩破壊なさった後、絶対の真理の法則は長くとどまるのである。四つとは何であろうか。

五　祭司よ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

祭司よ、実に、これら四つの記憶修習の現象化の修習されない状態により、真

面目に行なわれない状態により、真理勝者が完全煩悩破壊なさった後、絶対の真理の法則は長くとどまらないのである。友よ、そして実に、これら四つの記憶修習の現象化の修習された状態により、真面目に行なわれた状態により、真理勝者が完全煩悩破壊なさった後、絶対の真理の法則は長くとどまるのである」と。

六　このように言われたとき、その祭司は世尊にこう申し上げた。

「素晴らしいことです、友ゴータマよ。素晴らしいことです、友ゴータマよ。友ゴータマよ、例として、あるいは（煩悩によって）打ち倒されたものを起こして真っすぐにし、あるいは隠されたものを開き、あるいは宗教的に罪深い者に道を明かし、あるいは『眼ある人は種々の形状‐容姿を見る』と、暗黒に油による灯火をもたらすようなものであり、まさにこのように、世尊の多くの教訓によって、法則が説明されました。

このわたしは、世尊ゴータマと法則と向煩悩滅尽多学男出家教団を救いとして活用いたします。尊師ゴータマは、わたしを帰依信男として記憶実践なさってく

ださい。今日から先わたしが生きている限り、救いとして活用いたします」と。

【二六】第六　場所

一　あるとき、聖者サーリプッタと聖者マハーモッガラーナ（偉大なる乗り物の軌道）と聖者アヌルッダ（忠誠者）は、サーケータ（欲求したものを与える町）のカンタキー（とげのある植物）林にとどまっていた。

二　直ちに、聖者サーリプッタと聖者マハーモッガラーナは夕刻に独居から立ち上がり、聖者アヌルッダの所に行った。行くと、聖者アヌルッダとお互いに親しいあいさつを交わし、友情のこもった丁寧な談話を交わして、そばに座った。そばに座った聖者サーリプッタは、実に聖者アヌルッダにこう言った。

三「友アヌルッダよ、有学、有学といわれますが、友よ、いったいどのくらいの範囲まで有学なのでしょうか」と。

「友よ、実に四つの記憶修習の現象化の場所を修習した状態により、有学なのです。四つとは何でしょうか。

四　友よ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

友よ、実にこれら四つの記憶修習の現象化の場所を修習した状態により、有学なのです」と。

【二七】第七　等しい状態

一　あるとき、聖者サーリプッタと聖者マハーモッガラーナと聖者アヌルッダは、サーケータのカンタキー林にとどまっていた。

二　直ちに、聖者サーリプッタと聖者マハーモッガラーナは夕刻に独居から立ち上がり、聖者アヌルッダの所に行った。行くと、聖者アヌルッダとお互いに親しいあいさつを交わし、友情のこもった丁寧な談話を交わして、そばに座った。そばに座った聖者サーリプッタは、実に聖者アヌルッダにこう言った。

三「友アヌルッダよ、有学、有学といわれますが、友よ、いったいどのくらいの範囲まで有学なのでしょうか」と。

「友よ、実に四つの記憶修習の現象化の等しい状態を修習した状態により、有学なのです。四つとは何でしょうか。

四　友よ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

友よ、実にこれら四つの記憶修習の現象化の等しい状態を修習した状態により、有学なのです」と。

【二八】第八　世界

一―二　まさにその地にて。そばに座った聖者サーリプッタは、実に聖者アヌルッダにこう言った。

三「聖者アヌルッダよ、何の種々の法則の修習された状態により、真面目に行なわれた状態により、大いなる証智の状態に達したのでしょうか」と。

「友よ、四つの記憶修習の現象化の修習された状態により、真面目に行なわれた状態により、大いなる証智の状態に達したのです。四つとは何でしょうか。

四　友よ、ここにわたしは、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

友よ、実にわたしは、これら四つの記憶修習の現象化の修習された状態により、

真面目に行なわれた状態により、大いなる証智の状態に達したのです。
五　友よ、そしてしたがって、わたしはこれら四つの記憶修習の現象化の修習された状態により、真面目に行なわれた状態により、千の世界を証智するのです」と。

【二九】第九　シリヴァッダ

一　あるとき、聖者アーナンダはラージャガハ（国王の家）の竹林にあるカランダカニヴァーパ（リスのえさ）にとどまっていた。
二　ところでそのとき、シリヴァッダ（繁栄の輝き）後援者は病気で、苦しみ、重病であった。
三　直ちに、シリヴァッダ後援者は、ある召使いに呼びかけた。
「いいかい、召使いよ、来なさい。お前は聖者アーナンダの所に行きなさい。行って、わたしの名前で聖者アーナンダの足に頭でうやうやしくあいさつしなさい。

『尊者よ、シリヴァッダ後援者は病気で、苦しみ、重病です。彼は聖者アーナンダの足に頭でうやうやしくあいさつして、このように話しかけます。「尊者よ、どうか真に慈悲に応じて、聖者アーナンダはシリヴァッダ後援者の所にいらっしゃってください」と。』」

「わかりました、尊者よ。」

と、実にその召使いはシリヴァッダ後援者に承諾して、聖者アーナンダの所に行った。

四　行くと、聖者アーナンダに敬礼して、そばに座った。そばに座ったその召使いは、実に聖者アーナンダにこう言った。

「尊者よ、シリヴァッダ後援者は病気で、苦しみ、重病です。彼は聖者アーナンダの足に頭でうやうやしくあいさつして、このように話しかけます。『尊者よ、どうか真に慈悲に応じて、聖者アーナンダはシリヴァッダ後援者の所にいらっしゃってください』と。」

実に、聖者アーナンダは黙って同意したのである。

五　直ちに、聖者アーナンダは、正装して、鉢と上衣を持って、シリヴァッダ後援者の所に行った。行くと、用意された座に座った。座ると、実に聖者アーナンダはシリヴァッダ後援者にこう言った。

六「後援者よ、果たしてあなたは快方に向かっていますか。果たして生命の維持に耐えられますか。果たして種々の苦しみの感覚は減り全く進まず、その減少が認識され理解され、進行は全く認識されず理解されませんか」と。
「尊者よ、わたしは快方に向かっていず、生命の維持に耐えられず、わたしの種々の強烈な苦しみの感覚は進み全く減らず、その進行が認識され理解され、減少は全く認識されず理解されません」と。

七「後援者よ、だから、あなたはこのように学ぶべきです。
『身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。
種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去すべきである。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである』と。

後援者よ、あなたは全くこのように学ぶべきです」と。

八「尊者よ、世尊は、これら四つの記憶修習の現象化を指し示されました。それらの法則は、わたしの中に存在し、そしてわたしはそれらの法則に合致して暮らしています。

尊者よ、なるほど、わたしは身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

九　尊者よ、そして、世尊によって指し示されたこれら五つの下位に結びつけるきずながあり、わたしは自分自身において捨断していないものは何も認めることはないのです」と。

一〇「後援者よ、あなたにとって利得です。後援者よ、あなたにとってこの上ない幸福です。後援者よ、あなたは不還(ふげん)の果報を明らかにしたのです」と。

【三〇】第十　マーナディンナ

一　まさにその地にて。

二　ところでそのとき、マーナディンナ（施された寸法）後援者は病気で、苦しみ、重病であった。

三　直ちに、マーナディンナ後援者は、ある召使いに呼びかけた。
「いいかい、召使いよ、来なさい。お前は聖者アーナンダの所に行きなさい。行って、わたしの名前で聖者アーナンダの足に頭でうやうやしくあいさつしなさい。
『尊者よ、マーナディンナ後援者は病気で、苦しみ、重病です。彼は聖者アーナンダの足に頭でうやうやしくあいさつして、このように話しかけます。
「尊者よ、どうか真に慈悲に応じて、聖者アーナンダはマーナディンナ後援者の所にいらっしゃってください」と。』」
「わかりました、尊者よ。」
と、実にその召使いはマーナディンナ後援者に承諾して、聖者アーナンダの所に行った。

四　行くと、聖者アーナンダに敬礼して、そばに座った。そばに座ったその召使

いは、実に聖者アーナンダにこう言った。
「尊者よ、マーナディンナ後援者は病気で、苦しみ、重病です。彼は聖者アーナンダの足に頭でうやうやしくあいさつして、このように話しかけます。
『尊者よ、どうか真に慈悲に応じて、聖者アーナンダはマーナディンナ後援者の所にいらっしゃってください』と。」
実に、聖者アーナンダは黙って同意したのである。
五　直ちに、聖者アーナンダは、正装して、鉢と上衣を持って、マーナディンナ後援者の所に行った。行くと、用意された座に座った。座ると、実に聖者アーナンダはマーナディンナ後援者にこう言った。
六「後援者よ、果たしてあなたは快方に向かっていますか。果たして生命の維持に耐えられますか。果たして種々の苦しみの感覚は減り全く進まず、その減少が認識され理解され、進行は全く認識されず理解されませんか」と。
「尊者よ、わたしは快方に向かっていず、生命の維持に耐えられず、わたしの種々

の強烈な苦しみの感覚は進み全く減らず、その進行が認識され理解され、減少は全く認識されず理解されません。

七　尊者よ、そして、わたしは、このような苦しみの感覚に冒されながら、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

八　尊者よ、そして、世尊によって指し示されたこれら五つの下位に結びつけるきずながあり、尊者よ、わたしは自分自身において捨断していないことはどんな

ものも認めることがないのです」と。

九 「後援者よ、あなたにとって利得です。後援者よ、あなたにとってこの上ない幸福です。後援者よ、あなたは不還の果報を明らかにしたのです」と。

第三 戒品

その経群

戒、継続、衰退、取るに足らないもの、
祭司によって、そして地方、
等しさ、世界とシリヴァッダ、
マーナディンナによってそれらは十となると。

記憶修習の現象化に関係づけられた経典の

第三 戒と継続品

第四　伝え聞いた品

【三一】第一　伝え聞いたこと

一―二　サーヴァッティの地にて。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは身における身の観察である』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、かのその身における身の観察は修習できる』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

『修習した』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは感覚の観察である』と、わたしには、前

世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、かのその感覚の観察は修習できる』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。『修習した』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは心における心の観察である』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、かのその心における心の観察は修習できる』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

『修習した』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、『これは種々の法則における法則の観察である』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

向煩悩滅尽多学男たちよ、『その場合においては、かのその種々の法則における法則の観察は修習できる』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、神秘力が生じ、光が生じた。

『修習した』と、わたしには、前世において伝え聞いていなかった種々の法則において、眼が生じ、精通が生じ、神秘力が生じ、光が生じた」と。

【三二】第二　離愛著

一—二　サーヴァッティにおいて。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、修習され、真面目に行なわれたこれら四つの記憶修習の現象化は、完全なる現世否定（げんせひてい）・離愛著・滅尽・臨寂静（りんじゃくせい）・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめるのである。四つとは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい

向煩悩滅尽多学男たちよ、実に、修習され、真面目に行なわれたこれら四つの記憶修習の現象化は、完全なる現世否定・離愛著・滅尽・臨寂静・証智・正覚・煩悩破壊に至らしめるのである」と。

【三三】第三　しくじった

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの記憶修習の現象化をしくじった者たちはどんな人も、完全な苦しみの破壊に至る聖なる道をしくじったのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの記憶修習の現象化に着手した者たちはどんな人も、完全な苦しみの破壊に至る聖なる道に着手したのである。四つとは何であろうか。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察

してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい
向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの記憶修習の現象化をしくじった者たちはどんな人も、完全な苦しみの破壊に至る聖なる道をしくじったのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの記憶修習の現象化に着手した者たちはどんな人も、完全な苦しみの破壊に至る聖なる道に着手したのである」と。

【三四】第四　修習

一―二　サーヴァッティにおいて。

三「向煩悩滅尽多学男たちよ、修習され、真面目に行なわれたこれら四つの記憶修習の現象化は、この岸からかの岸に至ることに至らしめるのである。四つとは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい
　向煩悩滅尽多学男たちよ、実に、修習され、真面目に行なわれたこれら四つの記憶修習の現象化は、この岸からかの岸に至ることに至らしめるのである」と。

【三五】第五　記憶修習した

一―二　サーヴァッティ。
三「向煩悩滅尽多学男たちよ、向煩悩滅尽多学男は記憶修習し正智して時を過ごしなさい。これが君たちに対してわたしたちが諭すことである。
四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そしてどのように、向煩悩滅尽多学男は記憶修習するのだろうか。
　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去し

なさい。
種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい
向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は記憶修習するのである。
五　向煩悩滅尽多学男たちよ、そしてどのように、向煩悩滅尽多学男は正智するのだろうか。
向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男に、種々の知られた感覚が生じ、種々の知られたことが現象化し、種々の知られたことが存在しなくなる。

種々の知られた熟考が生じ、種々の知られたことが現象化し、種々の知られたことが存在しなくなる。種々の知られた認知が生じ、種々の知られたことが現象化し、種々の知られたことが存在しなくなる。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は正智するのである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、向煩悩滅尽多学男は記憶修習し正智して時を過ごしなさい。これが君たちに対してわたしたちが諭すことである」と。

【三六】第六　認識を

一―二　サーヴァッティにおいて。

三「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの記憶修習の現象化がある。四つとは何であろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの記憶修習の現象化である。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、実に、これら四つの記憶修習の現象化の修習された状態により、真面目に行なわれた状態により、二つの果報のうちの、ある果報を望むことができる。まさに見られる法則においては認識であり、あるいは存在

の繋縛（けばく）があるときは不還の状態である」と。

【三七】第七　衝動

一　サーヴァッティにおいて。

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの記憶修習の現象化がある。四つとは何であろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

彼が身において身を観察してとどまるとき、身における衝動は捨断される。衝動の捨断のために不死が現証したのである。

四　種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持っ

て、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
彼が種々の感覚において感覚を観察してとどまるとき、種々の感覚における衝動は捨断される。衝動の捨断により不死が現証したのである。
五　心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
彼が心において心を観察してとどまるとき、心における衝動は捨断される。衝動の捨断により不死が現証したのである。
六　種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
彼が種々の法則において法則を観察してとどまるとき、法則における衝動は捨断される。衝動の捨断により不死が現証したのである」と。

【三八】第八　理解して

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの記憶修習の現象化がある。四つとは何であろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

彼が身において身を観察してとどまるとき、身が理解されたのである。身の理解された状態により、不死が現証したのである。

四　種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

彼が種々の感覚において感覚を観察してとどまるとき、種々の感覚が理解されたのである。種々の感覚の理解された状態により、不死が現証したのである。

五　心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界に

おける渇望と落胆を除去しなさい。

彼が心において心を観察してとどまるとき、心が理解されたのである。心の理解された状態により、不死が現証したのである。

六　種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

彼が種々の法則において法則を観察してとどまるとき、種々の法則が理解されたのである。種々の法則の理解された状態により、不死が現証したのである」と。

【三九】第九　修習

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、わたしは四つの記憶修習の現象化の修習を指し示そう。それを聴きなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、四つの記憶修習の現象化の修習とは何であ

ろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、これが四つの記憶修習の現象化の修習である」と。

【四〇】第十　分別

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、君たちに、記憶修習の現象化と記憶修習の現象化の修習と記憶修習の現象化の修習に至る方法とを指し示そう。それを聴きなさい。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、記憶修習の現象化とは何であろうか。向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。
向煩悩滅尽多学男たちよ、これが記憶修習の現象化といわれる。
四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、記憶修習の現象化の修習とは何であろうか。向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において生起の法則を観察してとどまり、身において滅亡の法則を観察してとどまり、身において生起と滅亡の法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の感覚において生起の法則を観察してとどまり、種々の感覚において滅亡の法則を観察してとどまり、種々の感覚において生起と滅亡の法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において生起の法則を観察してとどまり、心において滅亡の法則を観察してとどまり、心において生起と滅亡の法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶

修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において生起の法則を観察してとどまり、種々の法則において滅亡の法則を観察してとどまり、種々の法則において生起と滅亡の法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これが記憶修習の現象化の修習といわれる。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、記憶修習の現象化の修習に至る方法とは何であろうか。

これはまさに聖なる八段階の道である。つまり、正見解(しょうけんかい)・正思惟(しょうしい)・正語(しょうご)・正行為(しょうこうい)・正生活(しょうせいかつ)・正奮闘(しょうふんとう)・正記憶修習(しょうきおくしゅじゅう)・正(しょう)サマディである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これが記憶修習の現象化の修習に至る方法といわれる」と。

第四　伝え聞いた品

その経群

伝え聞いたことと離愛著、
しくじった、修習、記憶修習した、
認識を、衝動、理解して、
修習、分別によってそれらは十となると。

第五　不死品

【四二】第一　不死

一　サーヴァッティ。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの記憶修習の現象化において心を正しく確立してとどまりなさい。君たちは不死を失ってはならない。四つとは何であろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界にお

ける渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

四 向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの記憶修習の現象化において心を正しく確立してとどまりなさい。君たちは不死を失ってはならない」と。

【四二】第二 生起

二 「向煩悩滅尽多学男たちよ、わたしは四つの記憶修習の現象化の生起と全滅とを指し示そう。それを聴きなさい。

三 向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、身の生起とは何であろうか。食物の生起により身の生起があり、食物の滅尽により身の全滅がある。

四 接触の生起により種々の感覚の生起があり、接触の滅尽により種々の感覚の

全滅がある。
五　心の要素-形状-容姿の生起により心の生起があり、心の要素-形状-容姿の滅尽により心の全滅がある。
六　作意の生起により種々の法則の生起があり、作意の滅尽により種々の法則の全滅がある」と。

【四三】第三　道

一　サーヴァッティ。
二　そこで実に、世尊は向煩悩滅尽多学男たちに呼びかけられた。「向煩悩滅尽多学男たちよ、あるとき、このわたしはウルヴェーラーのネーランジャラー河の岸のヤギ飼いのバンヤンジュにとどまり、第一の現正覚をした。
三　向煩悩滅尽多学男たちよ、このわたしが人里離れた所で独居していると、こ

のように心に考えが生じたのである。
『このただ一つの軌道の道は、種々の生命体の清浄のためであり、種々の不運な出来事と悲嘆に対して自由になるためであり、種々の苦しみと落胆の全滅のためであり、正しい体系の習得のためであり、煩悩破壊の現証のためである。すなわち、四つの記憶修習の現象化である。四つとは何であろうか。
向煩悩滅尽多学男は、あるいは身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。
向煩悩滅尽多学男は、あるいは種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。
向煩悩滅尽多学男は、あるいは心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。
向煩悩滅尽多学男は、あるいは種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきである。

このただ一つの軌道の道は、種々の生命体の清浄のためであり、種々の不運な出来事と悲嘆に対して自由になるためであり、種々の苦しみと落胆の全滅のためであり、正しい体系の習得のためであり、煩悩破壊の現証のためである。すなわち、四つの記憶修習の現象化である』と。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、直ちに、永続世界の支配者である神聖天は、わたしの心の考えを心によって認識し、例として、力のある男があるいは曲げた腕を伸ばし、あるいは伸ばした腕を曲げるような、まさにこのように、神聖天の世界で消滅し、同様にわたしの前方に生じた。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、直ちに、永続世界の支配者である神聖天は、一方の肩に上布をかけて、わたしに対して差し伸ばした手を前に曲げて合掌して、わたしにこう演説した。

『世尊よ、これはそのとおりです。最上善逝よ、これはそのとおりです。このただ一つの軌道の道は、種々の生命体の清浄のためであり、種々の不運な出来事と

悲嘆に対して自由になるためであり、種々の苦しみと落胆の全滅のためであり、正しい体系の習得のためであり、煩悩破壊の現証のためです。すなわち、四つの記憶修習の現象化です。四つとは何でしょうか。

尊師よ、向煩悩滅尽多学男は、あるいは身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

尊師よ、向煩悩滅尽多学男は、あるいは種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

尊師よ、向煩悩滅尽多学男は、あるいは心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

尊師よ、向煩悩滅尽多学男は、あるいは種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去すべきです。

尊師よ、このただ一つの軌道の道は、種々の生命体の清浄のためであり、種々の不運な出来事と悲嘆に対して自由になるためであり、種々の苦しみと落胆の全滅のためであり、正しい体系の習得のためであり、煩悩破壊の現証のためです。すなわち、四つの記憶修習の現象化です』と。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、永続世界の支配者である神聖天は、これを演説した。これを演説した後、そしてその上こう演説した。

『出生の破壊と終極を見る者は、
ただ一つの軌道の道を認識し理解し、
祝福と慈悲がある。
そして、氾濫を渡る者たちは、
この道によって、
以前に渡ったのであり、

渡るであろう』と。」

【四四】第四　記憶修習した

一　サーヴァッティにおいて。

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、向煩悩滅尽多学男は記憶修習してとどまりなさい。これが君たちに対してわたしたちが諭すことである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そしてどのように、向煩悩滅尽多学男は記憶修習するのだろうか。

向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に向煩悩滅尽多学男は記憶修習するのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、向煩悩滅尽多学男は記憶修習してとどまりなさい。これが君たちに対してわたしたちが諭すことである」と。

【四五】第五　善の積み重ねた山

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、四つの記憶修習の現象化を、善の積み重ねた山

と断言することは、正しく断言して断言するべきだ。向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは、すべての部分を含むこの善の積み重ねた山は、すなわち四つの記憶修習の現象化だからである。四つとは何であろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの記憶修習の現象化を、善の積み重ね

た山と断言することは、正しく断言して断言するべきだ。向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは、すべての部分を含むこの善の積み重ねた山は、すなわち四つの記憶修習の現象化だからである」と。

【四六】第六　約束維持解放

二　直ちに、ある向煩悩滅尽多学男は世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼してそばに座った。そばに座ったその向煩悩滅尽多学男は、実に世尊にこう申し上げた。

三「尊師よ、どうかわたしのために、要するに法則を指し示してください。わたしは世尊の法則を聴き、一人で隠遁し、怠惰でなく、熱心に、不屈の意志を持ってとどまることができます」と。

「向煩悩滅尽多学男よ、だから、君はどうしても最初に、種々の善の法則においい

て清浄にさせなさい。そして、最初の種々の善の法則には何があるか。

四　向煩悩滅尽多学男よ、ここに君は約束維持解放によって自制し慎んでとどまり、慣行と思索範囲の限定を獲得し、種々の微小な過失において気遣い洞察に満ちた人であり、（義務・責任を）負って種々の教えの真相について学びなさい。

　向煩悩滅尽多学男よ、実に君が約束維持解放によって自制し慎んでとどまり、慣行と思索範囲の限定を獲得し、種々の微小な過失において気遣い洞察に満ちた人であり、（義務・責任を）負って種々の教えの真相について学ぶときから、向煩悩滅尽多学男よ、君は戒によって戒を確立して、四つの記憶修習の現象化を修習しなさい。四つとは何であろうか。

五　向煩悩滅尽多学男よ、ここに君は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

　種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

六　向煩悩滅尽多学男よ、実に君が戒によって戒を確立して、これら四つの記憶修習の現象化をこのように修習するときから、向煩悩滅尽多学男よ、君には、あるいは夜あるいは日中に移っても、まさに種々の善の法則において発達が望まれ、衰退は全く望まれることがない」と。

七　直ちに、その向煩悩滅尽多学男は、世尊のお説きになったことに喜びを見いだし、感謝して、座から立って、世尊に敬礼し、右回りの礼をして去ったのである。

八　直ちに、その向煩悩滅尽多学男は一人で隠遁し、怠惰でなく、熱心に、不屈の意志を持ってとどまり、程なくして、その利益のために、良家の息子たちがま

さに完全に家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送る、その無上の神聖行の完達を、まさに見られる法則において、自ら証智し現証し達成してとどまった。「生は破壊され、神聖行は果たされ、なすべきことはなされ、引き続いてこの世に存在することの結果を得ることはない」と証智した。

九 そしてしたがって、その向煩悩滅尽多学男は、供養値魂たちのある者になったのであると。

【四七】第七　悪行

二 直ちに、ある向煩悩滅尽多学男は世尊の所に行った。行くと、世尊に敬礼してそばに座った。そばに座ったその向煩悩滅尽多学男は、実に世尊にこう申し上げた。

三 「尊師よ、どうかわたしのために、世尊は要するに法則を指し示してくださ

い。わたしは世尊の法則を聴き、一人で隠遁し、怠惰でなく、熱心に、不屈の意志を持ってとどまることができます」と。

「向煩悩滅尽多学男よ、だから、君はどうしても最初に、種々の善の法則において清浄にさせなさい。そして、最初の種々の善の法則には何があるか。

四　向煩悩滅尽多学男よ、ここに君は身の悪行(あくぎょう)を捨断して、身の善行を修習しなさい。言葉の悪行を捨断して、言葉の善行を修習しなさい。意識の悪行を捨断して、意識の善行を修習しなさい。

向煩悩滅尽多学男よ、実に君が身の悪行を捨断して、身の善行を修習し、言葉の悪行を捨断して、言葉の善行を修習し、意識の悪行を捨断して、意識の善行を修習するときから、向煩悩滅尽多学男よ、君は戒によって戒を確立して、四つの記憶修習の現象化を修習しなさい。四つとは何であろうか。

五　向煩悩滅尽多学男よ、ここに君は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

六　向煩悩滅尽多学男よ、実に君が戒によって戒を確立して、これら四つの記憶修習の現象化をこのように修習するときから、向煩悩滅尽多学男よ、君には、あるいは夜あるいは日中に移っても、まさに種々の善の法則において発達が望まれ、衰退は全く望まれることがない」と。

七　直ちに、その向煩悩滅尽多学男は、世尊のお説きになったことに喜びを見いだし、感謝して、座から立って、世尊に敬礼し、右回りの礼をして去ったのである。

八　直ちに、その向煩悩滅尽多学男は一人で隠遁し、怠惰でなく、熱心に、不屈の意志を持ってとどまり、程なくして、その利益のために、良家の息子たちがまさに完全に家庭生活の快適さを捨て、家なき状態になり、禁欲生活を送る、その無上の神聖行の完達を、まさに見られる法則において、自ら証智し現証し達成してとどまった。「生は破壊され、神聖行は果たされ、なすべきことはなされ、引き続いてこの世に存在することの結果を得ることはない」と証智した。

九　そしてしたがって、その向煩悩滅尽多学男は、供養値魂たちのある者になったのであると。

【四八】第八　友達

一　サーヴァッティにおいて。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、慈しみなさい。そして聴聞（ちょうもん）すべきことを考えさ

せなさい、友達や友人たちや親族や親類たちを。向煩悩滅尽多学男たちよ、彼らは君たちによって、四つの記憶修習の現象化の修習に鼓舞され、定着され、確立されなければならない。四つとは何であろうか。

三　向煩悩滅尽多学男よ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、慈しみなさい。そして聴聞すべきことを考えさせ

なさい、友達や友人たちや親族や親類たちを。向煩悩滅尽多学男たちよ、彼らは君たちによって、これら四つの記憶修習の現象化の修習に鼓舞され、定着され、確立されなければならない」と。

【四九】第九　感覚

一　サーヴァッティにおいて。

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの感覚がある。三つとは何であろうか。楽の感覚・苦しみの感覚・不苦不楽の感覚である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの感覚である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの感覚を理解することによって、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つとは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察

してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの感覚を理解することによって、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【五〇】第十　漏

二　向煩悩滅尽多学男たちよ、三つの漏がある。三つとは何であろうか。愛欲漏・生存漏・非神秘力漏である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの漏である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの漏の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つとは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの漏の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

第五　不死品

そこでの経群

不死、生起、道、

記憶修習した、善の積み重ねた山によって、

約束維持解放、悪行、

友達、感覚と漏によってと。

第六　ガンガー復誦

【五二】第一　東（一）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、ガンガー河は東に下り、東に傾斜し、東に至る。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである」と。

【五二】第二　東（二）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、ヤムナー（双子の河）河は東に下り、

東に傾斜し、東に至る。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである」と。

【五三】第三　東（三）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、アチーラヴァティー（すぐ必要とされる河）河は東に下り、東に傾斜し、東に至る。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習

の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである」と。

【五四】第四　東（四）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、サラブー（沼地の存在）河は東に下り、東に傾斜し、東に至る。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである」と。

【五五】第五　東（五）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、マヒー（大地の河）河は東に下り、東に傾斜し、東に至る。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである」と。

【五六】第六　東（六）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、種々の大きな河がある。つまり、ガンガー、ヤムナー、アチーラヴァティー、サラブー、マヒーである。それらはすべて東に下り、東に傾斜し、東に至る。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、

向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである」と。

【五七】第七　海（一）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、ガンガー河は海に下り、海に傾斜し、海に至る。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶

修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩

悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである」と。

【五八】第八 海(二)

二 「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、ヤムナー河は海に下り、海に傾斜し、海に至る。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである。

三 向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのであろうか。

四 向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去

しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである」と。

【五九】第九　海（三）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、アチーラヴァティー河は海に下り、海に傾斜し、海に至る。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである」と。

【六〇】第十　海（四）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、サラブー河は海に下り、海に傾斜し、海に至る。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによっ

て、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである」と。

【六二】第十一 海（五）

二 「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、マヒー河は海に下り、海に傾斜し、海に至る。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである。

三 向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである」と。

【六二】第十二　海（六）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、種々の大きな河がある。つまり、ガンガー、ヤムナー、アチーラヴァティー、サラブー、マヒーである。それらはすべて海に下り、海に傾斜し、海に至る。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである」と。

［経群］

東に下ることにより六つ、

そして海に下ることにより六つ、
これら二つが六つあって十二になり、
品(ほん)はそれによって著しく言われる。

ガンガー復誦は記憶修習の現象化によって詳しくされるべきである。

第七　怠惰でないこと品

【六三】第一　真理勝者

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、種々の生命体で、あるいは足のないもの、あるいは二本足のもの、あるいは四本足のもの、あるいは数多くの足があるもの、あるいは形状-容姿を持つもの、あるいは形状-容姿を持たないもの、あるいは認知を持つもの、あるいは認知を持たないもの、あるいは非認知を持ち非非認知を持つものについては、供養値魂・最上正覚者であられる真理勝者が、それらの最上であると言明される。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、善の法則はどんなものもすべて、怠惰でないことによってもたらされ、怠惰でないことに一致し、怠惰でないことはそれらの法則の最上であると言明されるのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、怠惰でない向煩悩滅尽多学男には、四つの記憶修

習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なう、これが望まれるべきである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな怠惰でない向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、怠惰でない向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのである」と。

【六四】第二　足跡

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、種々の動くことのできる生き物の生じた足跡はどんなものもすべて、象の足跡の中に兼ね備わるのであり、象の足跡が、それらの最上であると言明される。すなわち、偉大だからである。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、善の法則はどんなものもすべて、怠惰でないことによってもたらされ、怠惰でないことに一致し、怠惰でないことはそれらの法則の最上であると言明されるのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、怠惰でない向煩悩滅尽多学男には、四つの記憶修

習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なう、これが望まれるべきである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな怠惰でない向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのであろうか。

四 向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界におげる渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、怠惰でない向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのである」と。

【六五】第三　屋根

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、家の屋根の梁（はり）はどんなものもすべて、屋根に至り、屋根に下り、屋根に一致するのであり、屋根がそれらの最上であると言明される。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、善の法則はどんなものもすべて、怠惰でないことによってもたらされ、怠惰でないことに一致し、怠惰でないことはそれらの法則の最上であると言明されるのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、怠惰でない向煩悩滅尽多学男には、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なう、これが望まれ

るべきである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな怠惰でない向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのであろうか。

四 向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五 向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、怠惰でない向煩悩滅尽多学男は、四

つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのである」と。

【六六】第四　根

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、根の香りはどんなものも、この黒みがかった芳香性のビャクダンが、それらの最上であると言明される。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、善の法則はどんなものもすべて、怠惰でないことによってもたらされ、怠惰でないことに一致し、怠惰でないことはそれらの法則の最上であると言明されるのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、怠惰でない向煩悩滅尽多学男には、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なう、これが望まれるべきである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな怠惰でない向煩悩滅尽

多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、怠惰でない向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうので

ある」と。

【六七】第五　心材

二 「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、心材の香りはどんなものも、赤ビャクダンがそれらの最上であると言明される。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、善の法則はどんなものもすべて、怠惰でないことによってもたらされ、怠惰でないことに一致し、怠惰でないことはそれらの法則の最上であると言明されるのである。

三 向煩悩滅尽多学男たちよ、怠惰でない向煩悩滅尽多学男には、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なう、これが望まれるべきである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな怠惰でない向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目

に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、怠惰でない向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのである」と。

【六八】第六　マツリカ

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、花の香りはどんなものも、マツリカがそれらの最上であると言明される。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、善の法則はどんなものもすべて、怠惰でないことによってもたらされ、怠惰でないことに一致し、怠惰でないことはそれらの法則の最上であると言明されるのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、怠惰でない向煩悩滅尽多学男には、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なう、これが望まれるべきである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな怠惰でない向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去

しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、怠惰でない向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのである」と。

【六九】第七　王子

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、支配されている王子はどんな人もすべて、転輪王（てんりんおう）の家来であり、転輪王がそれらの最上であると言明される。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、善の法則はどんなものもすべて、怠惰でないことによってもたらされ、怠惰でないことに一致し、怠惰でないことはそれらの法則の最上であると言明されるのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、怠惰でない向煩悩滅尽多学男には、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なう、これが望まれるべきである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな怠惰でない向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去

しなさい。
種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
五　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、怠惰でない向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのである」と。

【七〇】第八　月

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、種々の星の光の光はどんなものもすべて、月の光の十六分の一にも値しないのであり、月の光がそれらの最上であると言明される。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、善の法則はどんなものもすべて、怠惰でないことによってもたらされ、怠惰でないことに一致し、怠惰でないことはそれらの法則の最上であると言明されるのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、怠惰でない向煩悩滅尽多学男には、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なう、これが望まれるべきである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな怠惰でない向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去

しなさい。
種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
五 向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、怠惰でない向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのである」と。

【七二】第九　太陽

二 「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、秋の時の突き通され、雲の消滅した天空で、太陽は上空の上方に出、空に達し、闇に至るすべてを滅ぼして、そして照り、そして燃焼し、そしてきらきら輝く。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、善の法則はどんなものもすべて、怠惰でないことによってもたらされ、怠惰でないことに一致し、怠惰でないことはそれらの法則の最上であると言明されるのである。

三 向煩悩滅尽多学男たちよ、怠惰でない向煩悩滅尽多学男には、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なう、これが望まれるべきである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな怠惰でない向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのであろうか。

四 向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察

してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
五　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、怠惰でない向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのである」と。

【七二】第十　衣服

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、種々の織物の衣服にはどんなものも、カーシ（太陽）国産の衣服がそれらの最上であると言明される。向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、善の法則はどんなものもすべて、怠惰でないことによってもたらされ、怠惰でないことに一致し、怠惰でないことはそれらの法則の最上であると言明されるのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、怠惰でない向煩悩滅尽多学男には、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なう、これが望まれるべきである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな怠惰でない向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去

しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、怠惰でない向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのである」と。

真理勝者、足跡、屋根、

根、心材によって、マツリカ、王子、月、太陽においてと、衣服によって第十の手段がある。

記憶修習の現象化によって、怠惰でないこと品は、記憶修習の現象化において詳しくされるべき品である。

第八　力でなすべきこと品

【七三】第一　力

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、力でなすべき仕事がなされるのはどんなものもすべて、大地によって大地に確立するのであって、まさにこのように、それらの力でなすべき仕事はなされる。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、戒によって戒を確立して、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、戒によって戒を確立して、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのであろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去

しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は、戒によって戒を確立して、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのである」と。

【七四】第二　種子

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、種々の草木の種子の群が発達し成長し充実するようになるのはどんなものもすべて、それらは大地によって大地に確立するのであって、このように、これらの草木の種子の群は発達し成長し充実するようになる。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、戒によって戒を確立して、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、種々の法則において、発達し成長し充実するのを得るのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、戒によって戒を確立して、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、種々の法則において、発達し成長し充実するのを得るのであろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察

してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は、戒によって戒を確立して、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、種々の法則において、発達し成長し充実するのを得るのである」と。

【七五】第三　龍

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、龍たちは山の王・雪山によって、身を発達させて力を持つ。そこで、彼らは身を発達させて力を持って、小さな池に降りる。小さな池に降りて、大きな池に降りる。大きな池に降りて、小さな河に降りる。小さな河に降りて、大きな河に降りる。大きな河に降りて、大海や大洋に降りる。そこで、彼らは身が大きくなり、充実するようになる。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、戒によって戒を確立して、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、種々の法則において大きくなり、充実するのを得るのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、戒によって戒を確立して、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、種々の法則において大きくなり、充実するのを得るのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は、戒によって戒を確立して、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、種々の法則において大きくなり、充実するのを得るのである」と。

【七六】第四　樹木

二 「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、樹木が東に下り、東に傾斜し、東に至り、それが根において切られたならば、どちらに倒れることによって崩れ落ちるであろうか」と。

「尊師よ、下っている所へであり、傾斜している所へであり、至る所へでありますす」と。

三 「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのであろうか。

四 向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察

してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、煩悩破壊に下り、煩悩破壊に傾斜し、煩悩破壊に至るのである」と。

【七七】第五　かめ

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、かめは打ち倒されて、まさに水を放棄し、注ぎ出すことに逆らうことはない。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、まさに種々の悪不善の法則を放棄し、注ぎ出すことに逆らうことはないのである。向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、まさに種々の悪不善の法則を放棄し、注ぎ出すことに逆らうことはないのであろうか。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、まさに種々の悪不善の法則を放棄し、注ぎ出すことに逆らうことはないのである」
と。

【七八】第六　穂先

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、米の穂先やあるいは小麦の穂先が正

しく精神集中され、手やあるいは足で踏みつけられたことによって、手やあるいは足に裂け口が生じ、あるいは血を生じさせると、この道理は存在する。これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、穂先の正しい精神集中の本質だからである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男が正しく精神集中した記憶修習の現象化の修習によって、非神秘力に裂け口が生じ、神秘力を生じさせ、煩悩破壊を現証すると、この道理は存在する。これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、見解の正しい精神集中の本質だからである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が正しく精神集中した見解によって、正しく精神集中した記憶修習の現象化の修習によって、非神秘力に裂け口が生じ、神秘力を生じさせ、煩悩破壊を現証するのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去

しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は正しく精神集中した見解によって、正しく精神集中した記憶修習の現象化の修習によって、非神秘力に裂け口が生じ、神秘力を生じさせ、煩悩破壊を現証するのである」と。

【七九】第七　空

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、空には様々な風が吹く。同様に種々の東の風が吹き、同様に種々の西の風が吹き、同様に種々の北の風が吹き、同様に種々の南の風が吹き、同様に種々の塵を持っている風が吹き、同様に種々の塵のない風が吹き、同様に種々の涼しい風が吹き、同様に種々の熱い風が吹き、同様に種々のかすかな風が吹き、同様に種々の甚だしい風が吹く。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男が四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、同様に四つの正しい努力の修習は完全に広がり、同様に四つの如意の基礎の修習は完全に広がり、同様に五つの潜在性の修習は完全に広がり、同様に五つの能力の修習は完全に広がり、同様に七つの覚醒段階の修習は完全に広がり、同様に聖なる八段階の道の修習は完全に広がるのである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修

習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、同様に四つの正しい努力、同様に四つの如意の基礎、同様に五つの潜在性、同様に五つの能力、同様に七つの覚醒段階、同様に聖なる八段階の道の修習が完全に広がるのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、同様に四つの正しい努力、同様に四つの如意の基礎、同様に五つの潜在性、同様に五つの能力、同様に七つの覚醒段階、同様に聖なる八段階の道の修習が完全に広がるのである」と。

【八〇】第八　滞在客

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、滞在客用の会館があり、そこでは、同様に東の方角から来て宿泊し、同様に西の方角から来て宿泊し、同様に北の方角から来て宿泊し、同様に南の方角から来て宿泊し、同様に武人階級が来て宿泊し、同様に祭司階級が来て宿泊し、同様に庶民階級が来て宿泊し、同様に奴隷階級が来て宿泊する。

向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、向煩悩滅尽多学男は、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、証智して理解できる種々の法則を証智して理解し、証智して捨断できる種々の法則を証智して捨断し、証智して現証できる種々の法則を証智して現証し、証智して修習できる種々の法則を証智して修習するのである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、証智して理解できる種々の法則とは何であろうか。それは、五つのとらわれの集積であると発言できる。

五つとは何であろうか。つまり、形状・容姿のとらわれの集積・感覚のとらわれの集積・表象のとらわれの集積・経験の構成のとらわれの集積・識別のとらわれの集積である。向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれらの法則が証智して理解できるのである。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、証智して捨断できる種々の法則とは何であろうか。非神秘力と生存渇愛(せいぞんかつあい)とである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらの法

則が証智して捨断できるのである。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、証智して現証できる種々の法則とは何であろうか。神秘力と離解脱とである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらの法則が証智して現証できるのである。

六　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、証智して修習できる種々の法則とは何であろうか。寂止と正観とである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらの法則が証智して修習できるのである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、証智して理解できる種々の法則を証智して理解し、証智して捨断できる種々の法則を証智して捨断し、証智して現証できる種々の法則を証智して現証し、証智して修習できる種々の法則を証智して修習するのであろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察

してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、証智して理解できる種々の法則を証智して理解し、証智して捨断できる種々の法則を証智して捨断し、証智して現証できる種々の法則を証智して現証し、証智して修習できる種々の法則を証智して修習するのである」と。

【八二】第九　河

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、例として、ガンガー河は東に下り、東に傾斜し、東に至るのだが、それで多くの人々の集まりが来て、シャベルとざるとを持って、『我々は、このガンガー河を西に下り、西に傾斜し、西に至るものにしよう』と。

向煩悩滅尽多学男たちよ、これについてどう思うか。実は同一に、その多くの人々の集まりは、ガンガー河を西に下り、西に傾斜し、西に至るものにすることができるだろうか」と。

「尊師よ、そのようなことはありません。」

「これはどうしてか。」

「尊師よ、ガンガー河は東に下り、東に傾斜し、東に至っております。西に下り、西に傾斜し、西に至るものにするには、それはたやすくありません。したがって、その多くの人々の集まりは、極限に疲労と苦悩を帯びていることになるでしょう」と。

三　「向煩悩滅尽多学男たちよ、全く同様に、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なっている向煩悩滅尽多学男を、国王たちや宰相たちや友たちや信頼できる顧問たちや親族たちや親類たちは、種々の楽しみを使って思い出させて、誘惑しようとする。『来なさい。いいかい、男よ、これらの赤っぽい黄色の衣はあなたの何を夢中にさせているのだ。つるつるになり、托鉢用の鉢のために歩き回って、何の意味があろうか。来なさい。還卑(げんぴ)して、種々の楽しみを楽しく味わって、種々の功徳を積みなさい』と。

向煩悩滅尽多学男たちよ、確かに、その向煩悩滅尽多学男が四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうことによって、教えに拒絶反応を起こして還卑すると、この道理は存在しない。これはどうしてか。向煩悩滅尽多学男たちよ、というのは、長い間、その心が遠離(おんり)に下り、遠離に傾斜し、遠離に至る者が確かに還卑すると、この道理は存在しないからである。

向煩悩滅尽多学男たちよ、そして、どんな向煩悩滅尽多学男が、四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのであろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

向煩悩滅尽多学男たちよ、このように実に、向煩悩滅尽多学男は四つの記憶修習の現象化を修習し、四つの記憶修習の現象化を真面目に行なうのである」と。

実（力）、種子と、龍と、
樹木、かめによって、穂先により、
空間にとどまっていることによって、あるいは滞在客により、河。
力でなすべきこと品

記憶修習の現象化によって詳しくされるべき品である。

【八二】第一　種々の願望

（Ⅰ　証智）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの願望がある。三つとは何であろうか。愛欲願望・生存願望・神聖行願望である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの願望である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの願望の証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの願望の証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(II　理解)

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの願望がある。三つとは何であろうか。愛欲願望・生存願望・神聖行願望である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの願望である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの願望の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの願望の理解のために、これら四

つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅲ　完全な破壊）

一〇「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの願望がある。三つとは何であろうか。愛欲願望・生存願望・神聖行願望である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの願望である。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの願望の完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの願望の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅳ　捨断)

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの願望がある。三つとは何であろうか。愛欲願望・生存願望・神聖行願望である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの願望である。
一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの願望の捨断のために、四つの

記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの願望の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【八三】第二　性質

（Ⅰ　証智）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの性質がある。三つとは何であろうか。『わたしは優れている』という性質と、『わたしは同じである』という性質と、『わたしは劣っている』という性質である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの性質である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの性質の証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの性質の証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅱ　理解)

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの性質がある。三つとは何であろうか。『わたしは優れている』という性質と、『わたしは同じである』という性質と、『わたしは劣っている』という性質である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの性質である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの性質の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの性質の理解のために、これら四

つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(III　完全な破壊)

一〇　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの性質がある。三つとは何であろうか。『わたしは優れている』という性質と、『わたしは同じである』という性質と、『わたしは劣っている』という性質である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの性質である。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの性質の完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの性質の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅳ　捨断)

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの性質がある。三つとは何であろうか。『わたしは優れている』という性質と、『わたしは同じである』という性質と、『わたしは劣っている』という性質である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これ

らが実に三つの性質である。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの性質の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの性質の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【八四】第三　漏

（I　証智）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの漏がある。三つとは何であろうか。愛欲漏・生存漏・非神秘力漏である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの漏である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの漏の証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察

してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの漏の証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅱ　理解)

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの漏がある。三つとは何であろうか。

愛欲漏・生存漏・非神秘力漏である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの漏である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの漏の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの漏の理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅲ　完全な破壊）

一〇「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの漏がある。三つとは何であろうか。愛欲漏・生存漏・非神秘力漏である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの漏である。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの漏の完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除

去しなさい。
種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの漏の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅳ　捨断）

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの漏がある。三つとは何であろうか。愛欲漏・生存漏・非神秘力漏である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実

に三つの漏である。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの漏の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの漏の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【八五】第四　生存

（I　証智）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの生存がある。三つとは何であろうか。愛欲による生存・形状による生存・非形状による生存である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの生存である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの生存の証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察

してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの生存の証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅱ　理解）

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの生存がある。三つとは何であろう

か。愛欲による生存・形状による生存・非形状による生存である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの生存である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの生存の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの生存の理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅲ　完全な破壊）

一〇「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの生存がある。三つとは何であろうか。愛欲による生存・形状による生存・非形状による生存である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの生存である。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの生存の完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除

去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの生存の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅳ　捨断）

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの生存がある。三つとは何であろうか。愛欲による生存・形状による生存・非形状による生存である。向煩悩滅尽

多学男たちよ、これらが実に三つの生存である。
一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの生存の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。
一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの生存の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【八六】第五　苦しみの本質

（Ⅰ　証智）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの苦しみの本質がある。三つとは何であろうか。苦しみの苦しみの本質・悪い経験の構成の苦しみの本質・悪化の苦しみの本質である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの苦しみの本質である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの苦しみの本質の証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの苦しみの本質の証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（II　理解）

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの苦しみの本質がある。三つとは何であろうか。苦しみの苦しみの本質・悪い経験の構成の苦しみの本質・悪化の苦しみの本質である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの苦しみの本質である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの苦しみの本質の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの苦しみの本質の理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅲ　完全な破壊）

一〇「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの苦しみの本質がある。三つとは何であろうか。苦しみの苦しみの本質・悪い経験の構成の苦しみの本質・悪化の苦しみの本質である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの苦しみの本質である。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの苦しみの本質の完全な破壊の

ために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの苦しみの本質の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅳ　捨断）

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの苦しみの本質がある。三つとは何であろうか。苦しみの苦しみの本質・悪い経験の構成の苦しみの本質・悪化の苦しみの本質である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの苦しみの本質である。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの苦しみの本質の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの苦しみの本質の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【八七】第六　三つの妨害

（I　証智）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの妨害がある。三つとは何であろうか。愛著（あいじゃく）は妨害であり、邪悪心（じゃあくしん）は妨害であり、迷妄（めいもう）は妨害である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの妨害である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの妨害の証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの妨害の証智のために、これら四

つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（II 理解）

六 「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの妨害がある。三つとは何であろうか。愛著は妨害であり、邪悪心は妨害であり、迷妄は妨害である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの妨害である。

七 向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの妨害の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八 向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの妨害の理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅲ　完全な破壊）

一〇「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの妨害がある。三つとは何であろうか。愛著は妨害であり、邪悪心は妨害であり、迷妄は妨害である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの妨害である。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの妨害の完全な破壊のために、

四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの妨害の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅳ　捨断）

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの妨害がある。三つとは何であろうか。愛著は妨害であり、邪悪心は妨害であり、迷妄は妨害である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの妨害である。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの妨害の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界にお

ける渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの妨害の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【八八】第七　垢
（I　証智）

二「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの垢がある。三つとは何であろうか。愛著は垢であり、邪悪心は垢であり、迷妄は垢である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの垢である。
三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの垢の証智のために、四つの記憶

修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの垢の証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（II　理解）

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの垢がある。三つとは何であろうか。愛著は垢であり、邪悪心は垢であり、迷妄は垢である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの垢である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの垢の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界にお

ける渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの垢の理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅲ　完全な破壊)

一〇「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの垢がある。三つとは何であろうか。愛著は垢であり、邪悪心は垢であり、迷妄は垢である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの垢である。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの垢の完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの垢の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅳ　捨断）

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの垢がある。三つとは何であろうか。愛著は垢であり、邪悪心は垢であり、迷妄は垢である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの垢である。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの垢の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界にお

ける渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの垢の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【八九】第八　錯乱

(I　証智)

一　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの錯乱がある。三つとは何であろうか。愛著は錯乱であり、邪悪心は錯乱であり、迷妄は錯乱である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの錯乱である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの錯乱の証智のために、四つの記

憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの錯乱の証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅱ　理解）

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの錯乱がある。三つとは何であろうか。愛著は錯乱であり、邪悪心は錯乱であり、迷妄は錯乱である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの錯乱である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの錯乱の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界にお

ける渇望と落胆を除去しなさい。
　種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの錯乱の理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅲ　完全な破壊）

一〇「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの錯乱がある。三つとは何であろうか。愛著は錯乱であり、邪悪心は錯乱であり、迷妄は錯乱である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの錯乱である。
一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの錯乱の完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの錯乱の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅳ　捨断)

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの錯乱がある。三つとは何であろうか。愛著は錯乱であり、邪悪心は錯乱であり、迷妄は錯乱である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの錯乱である。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの錯乱の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界にお

ける渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの錯乱の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【九〇】第九　感覚

(I　証智)

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの感覚がある。三つとは何であろうか。楽の感覚・苦しみの感覚・不苦不楽の感覚である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの感覚である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの感覚の証智のために、四つの記

憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの感覚の証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅱ　理解）

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの感覚がある。三つとは何であろうか。楽の感覚・苦しみの感覚・不苦不楽の感覚である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの感覚である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの感覚の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界にお

ける渇望と落胆を除去しなさい。
　種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの感覚の理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅲ　完全な破壊）

一〇　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの感覚がある。三つとは何であろうか。楽の感覚・苦しみの感覚・不苦不楽の感覚である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの感覚である。
一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの感覚の完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの感覚の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅳ　捨断)

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの感覚がある。三つとは何であろうか。楽の感覚・苦しみの感覚・不苦不楽の感覚である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの感覚である。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの感覚の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界にお

ける渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの感覚の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【九二】第十　渇愛

（I　証智）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの渇愛（かつあい）がある。三つとは何であろうか。愛欲渇愛・生存渇愛・離生存渇愛（りせいぞんかつあい）である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの渇愛である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの渇愛の証智のために、四つの記

憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの渇愛の証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅱ　理解）

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの渇愛がある。三つとは何であろうか。愛欲渇愛・生存渇愛・離生存渇愛である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの渇愛である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの渇愛の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界にお

ける渇望と落胆を除去しなさい。
　種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの渇愛の理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅲ　完全な破壊）

一〇「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの渇愛がある。三つとは何であろうか。愛欲渇愛・生存渇愛・離生存渇愛である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの渇愛である。
一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの渇愛の完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの渇愛の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅳ 捨断)

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら三つの渇愛がある。三つとは何であろうか。愛欲渇愛・生存渇愛・離生存渇愛である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に三つの渇愛である。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの渇愛の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界にお

ける渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら三つの渇愛の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

種々の願望を、性質、漏により、
苦しみの本質をと、三つの妨害、
垢と、錯乱と、感覚、
あるいは渇愛によって、願望品。

記憶修習の現象化によって詳しくされるべきものにより品となる。

第十　氾濫品

【九二】第一　氾濫

（Ⅰ　証智）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの氾濫がある。四つとは何であろうか。愛欲氾濫・生存氾濫・謬見(びゅうけん)氾濫・非神秘力氾濫である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの氾濫である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの氾濫の証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの汎濫の証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅱ　理解）

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの汎濫がある。四つとは何であろうか。愛欲汎濫・生存汎濫・謬見汎濫・非神秘力汎濫である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの汎濫である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの氾濫の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの氾濫の理解のために、これら四

つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅲ　完全な破壊）

一〇「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの氾濫がある。四つとは何であろうか。愛欲氾濫・生存氾濫・謬見氾濫・非神秘力氾濫である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの氾濫である。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの氾濫の完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの氾濫の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅳ　捨断）

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの氾濫がある。四つとは何であろうか。愛欲氾濫・生存氾濫・謬見氾濫・非神秘力氾濫である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの氾濫である。
一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの氾濫の捨断のために、四つの

記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの氾濫の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【九三】第二　鎖つきの首輪

（I　証智）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの鎖つきの首輪がある。四つとは何であろうか。愛欲の鎖つきの首輪・生存の鎖つきの首輪・謬見の鎖つきの首輪・非神秘力の鎖つきの首輪である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの鎖つきの首輪である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの鎖つきの首輪の証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
五 向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの鎖つきの首輪の証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(II 理解)

六 「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの鎖つきの首輪がある。四つとは何であろうか。愛欲の鎖つきの首輪・生存の鎖つきの首輪・謬見の鎖つきの首輪・非神秘力の鎖つきの首輪である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの鎖つきの首輪である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの鎖つきの首輪の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの鎖つきの首輪の理解のために、

これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅲ　完全な破壊)

一〇「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの鎖つきの首輪がある。四つとは何であろうか。愛欲の鎖つきの首輪・生存の鎖つきの首輪・謬見の鎖つきの首輪・非神秘力の鎖つきの首輪である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの鎖つきの首輪である。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの鎖つきの首輪の完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの鎖つきの首輪の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅳ　捨断)

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの鎖つきの首輪がある。四つとは何であろうか。愛欲の鎖つきの首輪・生存の鎖つきの首輪・謬見の鎖つきの首輪・非神秘力の鎖つきの首輪である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの

鎖つきの首輪である。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの鎖つきの首輪の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの鎖つきの首輪の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【九四】第三　とらわれ

（Ⅰ　証智）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つのとらわれがある。四つとは何であろうか。愛欲のとらわれ・謬見のとらわれ・戒誓（かいせい）のとらわれ・自己の教義のとらわれである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つのとらわれである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つのとらわれの証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察

してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五 向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つのとらわれの証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅱ 理解)

六 「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つのとらわれがある。四つとは何であ

ろうか。愛欲のとらわれ・謬見のとらわれ・戒誓のとらわれ・自己の教義のとらわれである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つのとらわれである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つのとらわれの理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つのとらわれの理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅲ　完全な破壊）

一〇「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つのとらわれがある。四つとは何であろうか。愛欲のとらわれ・謬見のとらわれ・戒誓のとらわれ・自己の教義のとらわれである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つのとらわれである。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つのとらわれの完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除

去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つのとらわれの完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅳ　捨断)

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つのとらわれがある。四つとは何であろうか。愛欲のとらわれ・謬見のとらわれ・戒誓のとらわれ・自己の教義のと

らわれである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つのとらわれである。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つのとらわれの捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つのとらわれの捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【九五】第四　束縛

（Ⅰ　証智）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの束縛がある。四つとは何であろうか。渇望は身の束縛であり、害心は身の束縛であり、戒誓のとらわれは身の束縛であり、これぞ絶対の真理と執着することは身の束縛である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの束縛である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの束縛の証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの束縛の証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅱ　理解）

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの束縛がある。四つとは何であろうか。渇望は身の束縛であり、害心は身の束縛であり、戒誓のとらわれは身の束縛であり、これぞ絶対の真理と執着することは身の束縛である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの束縛である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの束縛の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの束縛の理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅲ　完全な破壊）

一〇　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの束縛がある。四つとは何であろうか。渇望は身の束縛であり、害心は身の束縛であり、戒誓のとらわれは身の束縛であり、これぞ絶対の真理と執着することは身の束縛である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの束縛である。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの束縛の完全な破壊のために、

四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの束縛の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅳ 捨断）

一四 「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら四つの束縛がある。四つとは何であろうか。渇望は身の束縛であり、害心は身の束縛であり、戒誓のとらわれは身の束縛であり、これぞ絶対の真理と執着することは身の束縛である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に四つの束縛である。

一五 向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの束縛の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六 向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七 向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら四つの束縛の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【九六】第五 性癖

（I 証智）

二 「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら七つの性癖がある。七つとは何であろうか。愛欲愛著の性癖・嫌悪の性癖・謬見の性癖・疑念の性癖・慢の性癖・生存愛著の性癖・非神秘力の性癖である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に七つ

の性癖である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら七つの性癖の証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら七つの性癖の証智のために、これら四

つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅱ　理解)

六「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら七つの性癖がある。七つとは何であろうか。愛欲愛著の性癖・嫌悪の性癖・謬見の性癖・疑念の性癖・慢の性癖・生存愛著の性癖・非神秘力の性癖である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に七つの性癖である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら七つの性癖の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九 向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら七つの性癖の理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅲ　完全な破壊)

一〇 「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら七つの性癖がある。七つとは何であろうか。愛欲愛著の性癖・嫌悪の性癖・謬見の性癖・疑念の性癖・慢の性癖・生存愛著の性癖・非神秘力の性癖である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に七

つの性癖である。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら七つの性癖の完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら七つの性癖の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅳ　捨断)

一四「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら七つの性癖がある。七つとは何であろうか。愛欲愛著の性癖・嫌悪の性癖・謬見の性癖・疑念の性癖・慢の性癖・生存愛著の性癖・非神秘力の性癖である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に七つの性癖である。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら七つの性癖の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除

去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら七つの性癖の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【九七】第六　愛欲の構成部分

（I　証智）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの愛欲の構成部分がある。五つとは何であろうか。眼によって識別される種々の形状-容姿は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、耳によって識別される種々の声は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、鼻によって識別される種々の香りは、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、舌によって識別される種々の味は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、身によって識別される種々の接触は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの愛欲の構成部分である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの愛欲の構成部分の証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの愛欲の構成部分の証智のために、

これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅱ　理解）

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの愛欲の構成部分がある。五つとは何であろうか。眼によって識別される種々の形状-容姿は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、耳によって識別される種々の声は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、鼻によって識別される種々の香りは、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、舌によって識別される種々の味は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、身によって識別される種々の接触は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの愛欲の構成

部分である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの愛欲の構成部分の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの愛欲の構成部分の理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅲ　完全な破壊）

一〇「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの愛欲の構成部分がある。五つとは何であろうか。眼によって識別される種々の形状-容姿は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着することと・欲求することであり、耳によって識別される種々の声は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、鼻によって識別される種々の香りは、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、舌によって識別される種々の味は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、身によって識別される種々の接触は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・

欲求することである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの愛欲の構成部分である。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの愛欲の構成部分の完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの愛欲の構成部分の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅳ　捨断)

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの愛欲の構成部分がある。五つとは何であろうか。眼によって識別される種々の形状‐容姿は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、耳によって識別される種々の声は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、鼻によって識別される種々の香りは、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、舌によって識別される種々の味は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することであり、身によって識別される種々

の接触は、希望したこと・楽しむこと・愉快なこと・喜ぶこと・愛着すること・欲求することである。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの愛欲の構成部分である。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの愛欲の構成部分の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの愛欲の構成部分の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【九八】第七　障害

（Ⅰ　証智）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの障害がある。五つとは何であろうか。愛欲の衝動による障害・害心による障害・頑固と愚鈍による障害・興奮と後悔（エネルギー不足）による障害・疑念による障害である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの障害である。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの障害の証智のために、四つの記

憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの障害の証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(II　理解)

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの障害がある。五つとは何であろうか。愛欲の衝動による障害・害心による障害・頑固と愚鈍による障害・興奮と後悔（エネルギー不足）による障害・疑念による障害である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの障害である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの障害の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九 向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの障害の理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅲ 完全な破壊)

一〇 「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの障害がある。五つとは何であろうか。愛欲の衝動による障害・害心による障害・頑固と愚鈍による障害・興奮と後悔(エネルギー不足)による障害・疑念による障害である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの障害である。

一一 向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの障害の完全な破壊のために、

四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの障害の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅳ　捨断)

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの障害がある。五つとは何であろうか。愛欲の衝動による障害・害心による障害・頑固と愚鈍による障害・興奮と後悔（エネルギー不足）による障害・疑念による障害である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの障害である。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの障害の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの障害の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【九九】第八　種々の集積

（I　証智）

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つのとらわれの集積がある。五つとは何であろうか。つまり、形状-容姿のとらわれの集積・感覚のとらわれの集積・表象のとらわれの集積・経験の構成のとらわれの集積・識別のとらわれの集積で

ある。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つのとらわれの集積である。
三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つのとらわれの集積の証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。
四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つのとらわれの集積の証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（II　理解）

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つのとらわれの集積がある。五つとは何であろうか。つまり、形状-容姿のとらわれの集積・感覚のとらわれの集積・表象のとらわれの集積・経験の構成のとらわれの集積・識別のとらわれの集積である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つのとらわれの集積である。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つのとらわれの集積の理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去

しなさい。
種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
九 向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つのとらわれの集積の理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅲ 完全な破壊)

一〇 「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つのとらわれの集積がある。五つとは何であろうか。つまり、形状-容姿のとらわれの集積・感覚のとらわれの集積・

表象のとらわれの集積・経験の構成のとらわれの集積・識別のとらわれの集積である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つのとらわれの集積である。

一一 向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つのとらわれの集積の完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二 向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つのとらわれの集積の完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(IV　捨断)

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つのとらわれの集積がある。五つとは何であろうか。つまり、形状-容姿のとらわれの集積・感覚のとらわれの集積・表象のとらわれの集積・経験の構成のとらわれの集積・識別のとらわれの集積である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つのとらわれの集積である。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つのとらわれの集積の捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観

察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つのとらわれの集積の捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【一〇〇】第九　下位に結びつける

(I　証智)

二　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの下位に結びつけるきずながある。五つとは何であろうか。有身謬見(うしんびゅうけん)・疑念・戒誓のとらわれ・愛欲の衝動・害心である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの下位に結びつけるきずなである。

三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの下位に結びつけるきずなの証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、

世界における渇望と落胆を除去しなさい。
心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。
種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの下位に結びつけるきずなの証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（II　理解）

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの下位に結びつけるきずながある。五つとは何であろうか。有身謬見・疑念・戒誓のとらわれ・愛欲の衝動・害心である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの下位に結びつけるきずなである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの下位に結びつけるきずなの理解

のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの下位に結びつけるきずなの理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅲ　完全な破壊）

一〇「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの下位に結びつけるきずながある。五つとは何であろうか。有身謬見・疑念・戒誓のとらわれ・愛欲の衝動・害心である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの下位に結びつけるきずなである。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの下位に結びつけるきずなの完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの下位に結びつけるきずなの完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（Ⅳ　捨断）

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの下位に結びつけるきずながある。五つとは何であろうか。有身謬見・疑念・戒誓のとらわれ・愛欲の衝動・害心である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの下位に結びつけるきずなである。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの下位に結びつけるきずなの捨

断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの下位に結びつけるきずなの捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

【一〇二】第十　上位に結びつける

（I　証智）

二 「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの上位に結びつけるきずながある。五つとは何であろうか。形状愛著・非形状愛著・慢・興奮・非神秘力である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの上位に結びつけるきずなである。

三 向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの上位に結びつけるきずなの証智のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

四 向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの上位に結びつけるきずなの証智のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（II　理解）

六　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの上位に結びつけるきずながある。五つとは何であろうか。形状愛著・非形状愛著・慢・興奮・非神秘力である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの上位に結びつけるきずなである。

七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの上位に結びつけるきずなの理解のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の

現象化とは何であろうか。

八　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

九　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの上位に結びつけるきずなの理解のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

（III　完全な破壊）

一〇「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの上位に結びつけるきずながある。五つとは何であろうか。形状愛著・非形状愛著・慢・興奮・非神秘力である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの上位に結びつけるきずなである。

一一　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの上位に結びつけるきずなの完全な破壊のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一二　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界にお

ける渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一三　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの上位に結びつけるきずなの完全な破壊のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

(Ⅳ　捨断)

一四　「向煩悩滅尽多学男たちよ、これら五つの上位に結びつけるきずながある。五つとは何であろうか。形状愛著・非形状愛著・慢・興奮・非神秘力である。向煩悩滅尽多学男たちよ、これらが実に五つの上位に結びつけるきずなである。

一五　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの上位に結びつけるきずなの捨断のために、四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである。四つの記憶修習の現象化とは何であろうか。

一六　向煩悩滅尽多学男たちよ、ここに向煩悩滅尽多学男は、身において身を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の感覚において感覚を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

心において心を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

種々の法則において法則を観察してとどまり、熱心に正智し記憶修習を持って、世界における渇望と落胆を除去しなさい。

一七　向煩悩滅尽多学男たちよ、実にこれら五つの上位に結びつけるきずなの捨断のために、これら四つの記憶修習の現象化が修習されるべきである」と。

［経群］
汜濫、鎖つきの首輪、とらわれ、
束縛、性癖によってと、
愛欲の構成部分、障害、
種々の集積、下位と上位に結びつけると。

汜濫品。
記憶修習の現象化によって詳しくされるために品となる。
道に関係づけられた経典が詳しくされたとおりに、そのように記憶修習の現象化に関係づけられた経典は詳しくされるべきである。
第三の記憶修習の現象化に関係づけられた経典は完結した。

※オウム真理教では、本来の意味を正確に表わしていない既製の仏教用語は用いず、パーリ語原典を忠実に翻訳し、吟味した結果、決定した訳語を使っています。以下に、代表的な言葉の対比表を掲げますので参照してください。また、仏教・ヨーガの言語対比表も参考までに掲載しました。

◆言語対比表

欲界→愛欲界
無間地獄→超期間激苦地獄
叫喚地獄→号叫激苦地獄
鉢特摩地獄→紅蓮華のような状態になる激苦地獄
餓鬼→低級霊
阿修羅→不飲酒天
憤怒天→意識堕落天
戯忘天→戯れ堕落天
地居天→地上愛欲神天
四天王衆天→四大王天
持国天→堅固王国天
増長天→成長天
広目天→統治変化自在天空天
毘沙門天、多聞天→守庶民外傷天
夜叉→人食い鬼神
忉利天→三十三天
帝釈天→有能神
夜摩天→支配流転双生児天
閻魔王→支配流転双生児王
兜率天→除冷淡天

楽変化天、化楽天→創造満足天
他化自在天→為他神以神通創造欲望満足従事天

悪魔→破滅天

色界→形状界
梵天→神聖天
梵衆天→神聖衆愛欲神天
梵輔天→神聖臣天
大梵天→大神聖天
浄天→美天
遍浄天→総美愛欲本質神天
広果天→偉大果報愛欲本質神天
浄居天→清潔居住天
無煩天→超空間愛欲神天

無熱天→超燃焼愛欲神天
善現天→善安楽愛欲神天
善見天→善現象愛欲神天
色究竟天→超越童子愛欲本質神天

無色界→非形状界
空無辺処→空間無辺境
識無辺処→識別無辺境
無所有処→無所有境
非想非非想処→非認知非非認知境

想受滅→認知経験滅尽

須弥山→完全無欠山
東勝身洲→東の高貴なる身体を得る大陸
南贍部洲、閻浮提→南のバラリンゴの大陸
西牛貨洲→西の願いがかなう牛の大陸
北倶盧洲→北の悪しき音の大陸

成劫→再生期
住劫→継続期
壊劫→還元期

釈迦牟尼→サキャ神賢
如来→真理勝者
応供→供養値魂
正等覚→最上正覚者
明行足→智徳成就者

善逝→最上善逝
世間解→世間解（変更なし）
無上士→無上士（変更なし）
調御丈夫→丈夫調御者
天人師→天人師（変更なし）
仏陀→覚者
世尊→世尊（変更なし）

菩薩→到達真智運命魂
比丘→向煩悩滅尽多学男
比丘尼→向煩悩滅尽多学女
優婆塞→帰依信男
優婆夷→帰依信女
僧伽→出家教団
長老→高弟

声聞→多学の弟子
沙門→出家修行者
沙弥→少年出家者
遊行者→托鉢修行者

バラモン→祭司
クシャトリヤ→武人
ヴァイシャ→庶民
シュードラ→奴隷

四双八輩→四対の人々－八つの宗教的特性を持つ人々
預流→真理の流れに入ること
一来→（愛欲界に）一度だけ再生すること
不還→不還（変更なし）

阿羅漢→供養値魂

四預流支→四つの真理の流れに入る段階

四聖諦→四つの聖なる絶対の真理
苦聖諦→苦しみの聖なる絶対の真理
集聖諦→苦しみの生起の聖なる絶対の真理
滅聖諦→苦しみの滅尽の聖なる絶対の真理
道聖諦→苦しみの滅尽に至る方法の聖なる絶対の真理

四念処→四つの記憶修習の現象化

四正断、四正勤→四つの正しい努力

四如意足、四神足→四つの如意の基礎
欲如意足→決意如意の基礎
精進如意足→精進如意の基礎
心如意足→思念如意の基礎
観如意足→観慧如意の基礎

五根→五つの潜在性
信根→信の潜在性
精進根→精進の潜在性
念根→記憶修習の潜在性
定根→サマディの潜在性
慧根→智慧の潜在性

五力→五つの能力
信力→信の能力
精進力→精進の能力
念力→記憶修習の能力
定力→サマディの能力
慧力→智慧の能力

七覚支→七つの覚醒段階
念覚支→記憶修習正覚段階
択法覚支→法則の検討正覚段階
精進覚支→精進正覚段階
喜覚支→喜正覚段階
軽安覚支→静寂正覚段階
定覚支→サマディ正覚段階
捨覚支→無頓着正覚段階

八正道→聖なる八段階の道
正見→正見解
正思惟→正思惟（変更なし）
正語→正語（変更なし）
正業→正行為
正命→正生活
正精進→正奮闘
正念→正記憶修習
正定→正サマディ

三苦→三つの苦しみの本質
苦苦→苦しみの苦しみの本質
行苦→悪い経験の構成の苦しみの本質
壊苦→悪化の苦しみの本質

三受→三つの感覚
楽受→楽の感覚
苦受→苦しみの感覚
不苦不楽受→不苦不楽の感覚

四無量心
慈→聖慈愛
悲→聖哀れみ
喜→聖称賛
捨→聖無頓着

五取蘊→五つのとらわれの集積
色取蘊→形状・容姿のとらわれの集積
受取蘊→感覚のとらわれの集積
想取蘊→表象のとらわれの集積

行取蘊→経験の構成のとらわれの集積
識取蘊→識別のとらわれの集積

五蓋→五つの障害
貪欲蓋→愛欲の衝動による障害
瞋恚蓋→害心による障害
惛眠蓋→頑固と愚鈍による障害
掉悔蓋→興奮と後悔による障害
疑蓋→疑念による障害

五妙欲→五つの愛欲の構成部分
色→形状-容姿
声→声
香→香り
味→味

触→接触

五下分結→五つの下位に結びつけるきずな
有身見→有身謬見
疑→疑念
戒禁取→戒誓のとらわれ
貪欲→愛欲の衝動
瞋恚→害心

五上分結→五つの上位に結びつけるきずな
色貪→形状愛著
無色貪→非形状愛著
慢→慢（変更なし）
掉挙→興奮
無明→非神秘力

八解脱→八つの離解脱
八勝処→八つの克服境
十遍処→十全境
十波羅蜜→十の徹底
十二縁起の法→十二の条件生起の段階
　無明→非神秘力
　行→経験の構成
　識→識別
　名色→心の要素-形状-容姿
　六処→六つの感覚要素と対象
　触→接触
　受→感覚
　愛→渇愛
　取→とらわれ

有→生存
生→出生
苦→苦しみ
信→信（変更なし）
悦→歓喜
喜→喜（変更なし）
軽安→静寂
楽→楽（変更なし）
三昧→サマディ
如実知見→如実精通見解
遠離→現世否定
離貪→離愛著
解脱→離解脱

涅槃→煩悩破壊
般涅槃→完全煩悩破壊
中般涅槃→中完全煩悩破壊
生般涅槃→減少完全煩悩破壊
無行般涅槃→形状界にて経験の構成がなく功徳の果報を受けつつある完全煩悩破壊
有行般涅槃→形状界にて経験の構成があり真理の実践による完全煩悩破壊
一種者→一つの種子を持つ者
家家者→徳の高い家から家へと転生する者
極七返→最高七回流転者

正智→正精通
正解脱→正離解脱
心解脱→心の離解脱
慧解脱→智慧の離解脱
殺生→殺生（変更なし）
偸盗→与えられないものを強奪すること
邪淫→愛欲における邪悪な行為
妄語→嘘の言い方
綺語→軽薄語
悪口→乱暴な言葉
両舌→中傷の言葉
貪→愛著
瞋→邪悪心
癡→迷妄

愁→不運な出来事
悲→悲嘆
苦→苦しみ
憂→激痛
悩→悩み

五趣→五つの方向
善趣→幸福に向かうこと
悪趣→悲痛に向かうこと

カルマ→要素の蓄積
法→法則
梵行→神聖行
布薩→戒誓行
波羅提木叉→約束維持解放

頭陀→断修行障礙
袈裟衣→赤っぽい黄色の衣
衆生→生命体
四大種→四大元素
本生経→輪廻転生談

◆仏教・ヨーガ　言語対比表

愛欲界―現象界
形状界―アストラル世界
非形状界―コーザル世界
愛著―サットヴァ
邪悪心―ラジャス
迷妄―タマス



あなたに絶対の幸福を約束する

——オウム真理教

心身の悩みを解決したい
超健康体を得たい
豊かな生活を送りたい
素晴らしい人間関係を築きたい
スーパー・パワーを身につけたい
来世も幸福に生きたい
解脱し、永遠の至福を得たい

最高の教義、最高の奥儀、そして麻原尊師のもと、すべては確実に実現します。

●オウム真理教が誇る三つの基本的修行体系

1、マハーヤーナ修行体系

現実生活をより豊かにし、幸福な人生をお約束します。ご年輩の方、仕事が忙しく時間のあまり取れない方にお勧めです。

2、タントラ・ヴァジラヤーナ修行体系

行法、イニシエーションを中心として進め、霊性を向上させて、神秘世界を実体験することができます。この修行体系を選択すれば今生で解脱し、悟ることも夢ではありません。

3、テーラヴァーダ修行体系

原始仏教の上座部仏教を再現しました。真理にのっとって清浄な日常生活を送ることによって、幸せな来世が約束されます。また、経典の記憶修習によって心の成熟が促され、悟りを得ることが可能です。オウム真理教の深遠な教義を徹底的に学びたい方に最適です。

※資料請求券を貼付けしたハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。入信案内等、詳しい資料をお送りします。

キリトリ線

根源仏典3
資料請求券

正統派上座部仏教の再現

テーラヴァーダ修行体系

『サキャ神賢直説根源仏典』翻訳の成果がここに！

わかりやすい法則と経典があるからこそ、実践可能な在家での正しい修行。正確な法則と経典があるからこそ、実現する在家での解脱と悟り。 テーラヴァーダ修行体系は麻原尊師の説かれる深遠な法則と完璧に翻訳された『サキャ神賢直説根源仏典』を学び、心の成熟・智慧の向上を目指す方に最適の修行体系です。



テーラヴァーダの智慧の真髄

『仏典研究』



麻原彰晃尊師説法、『サキャ神賢直説根源仏典』、高弟の成就体験談と盛りだくさんで、オウム真理教の教義が満載。仏典ファン、真理の探究者には見逃せない中味の濃い月刊誌です。

テーラヴァーダ修行体系を選択された方に、毎月お届けいたします。

キミはもう尊師を聴いたか？

オウム真理教のラジオ放送

エウアンゲリオン・テス・バシレイアス

――真理の教えは全世界へのべ伝えられる

真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師の声があなたの耳を直撃！
今、オウム真理教では、日本全国に、
そして全世界に向けては英語で、毎日ラジオ放送を行なっています。
その名も「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」。
ギリシャ語で「御国の福音」という意味です。
その名に違わず、番組内容は魅力たっぷり。
ラジオから流れ出る〝福音〟は、きっと、あなたの心をときほぐし、
安らぎを与えてくれるでしょう。
そして、明日への新たな活力を与えてくれるに違いありません。

主な番組内容

- 真理の御魂　最聖 麻原彰晃尊師説法
- 麻原尊師のノストラダムス秘密の大予言
- わたしは見た！ これが尊師の超越神力
- 驚異の運命学、大宇宙真理占星学

その他にも興味の尽きない内容が盛りだくさん！

日本全国どこでも AM1476kHz
22:15～1:15

英語放送（17,770kHz, 17,860kHz 他）
5:30～6:00, 13:30～14:00

※今週の聴きどころなどを毎日紹介する便利なテレフォンサービスをぜひご利用ください。
TEL 03（5450）3602
※タイアップマガジン『えんじょい・はぴねす』定期購読受付中！
※詳しいお問い合わせは「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」係まで。
TEL 03（5450）6037

好評！あなたとオウムをつなぐ

パソコン通信、〝オウム真理教ネット〟

オウムについてもっと詳しく知りたい……
教義その他について、
いろいろと聞きたいことがある……
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

オウム真理教ネット

電子掲示板

- ○最新情報！ オウム真理教
- ○尊師説法
- ○ジャータカ仏典
- ○なんでも人生相談
- ○予言・占いコーナー
- ○フリートーク

電子会議室

- ○オウム真理教ってどんなとこ？
- ○わたしの神秘体験
- ○オウム真理教のラジオ放送について
- ○ザンゲの部屋

電子メール

- ○あなたの気にいった相手に

チャット

- ○画面を通して解脱者と さあ 語ろう

フリーソフト

- ○尊師画像
- ○真理紙芝居
- ○転生うらないゲーム

などなど

"オウム真理教ネット" のご紹介

TEL番号	03-5300-1800（4回線） Tri-P利用可能 (CXAUMNET)
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BIT-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、 SYSOPあてメールにて申請

面倒な手続きはいっさいありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

ただ今、新入会員の方に素敵なプレゼント（『えんじょい・はぴねす』最新号）をさしあげています。

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。
〒156 東京都世田谷区赤堤2-42-5
オウム真理教ネット事務局 TEL 03-5300-1805

オウム出版刊行案内

尊師説法集　麻原彰晃の世界

麻原彰晃の世界　PART1

幸福に至る四つの実践

B6判　二五〇〇円

尊師説法集第一弾。仏教の基本ともいえる「四預流支」を縦横無尽に説いた画期的な説法群は、魂の解放を願う人はもちろんのこと、幸福な人生を求める人に本当の生き方を指し示す。

麻原彰晃の世界　PART2

尊師、麻原彰晃が斬る！

B6判　九八〇円

願望成就の秘法、UFO&宇宙人、医学、幼児教育、音楽、食養、輪廻転生etc……。麻原尊師の魅力たっぷりの説法に、歌手鹿島とも子さんとの対談も加わってますます充実。

麻原彰晃の世界　PART3

真実、六道輪廻

B6判　九八〇円

六道とは、輪廻とは……。麻原尊師と高弟たちの瞑想体験が証明する六道輪廻の真実。大霊界、チャネリングなどの間違いだらけの死生観に終止符を打つ書。

麻原彰晃の世界　PART4

宗教にだまされるな！

B6判　九八〇円

霊障、水子供養、先祖供養、守護霊……。この世にはびこる間違った観念を打ち破り、正しい意味を説き示す麻原尊師。本当の幸福と心の安らぎを得たいあなたに。

麻原彰晃の世界　PART5

すべてを解き明かすカルマの理法がここに

絶対の真理

B6判　九八〇円

なぜ幸福なのか？　なぜ不幸なのか？　運命の鍵を握る〝カルマの法則〟。すべての人がこの法則に支配されていることを豊富な実例が証明！　この一冊があなたを幸福に導く。

麻原彰晃の世界　PART6

今生と来世を幸せに生きるウッタマダンマここに公開！

願望成就の秘法

B6判　九八〇円

思いのままに人生を生きられたらどんなに素晴らしいことだろう……。心からの幸福を願うすべての人々に、麻原尊師が仏教の願望成就の秘法をそっと伝授する。

麻原彰晃の世界　PART7

仏教真理・八正道

B6判　八〇〇円

原始仏教の根幹をなす教え「八正道」。仏教の基礎ともいえるサキャ神賢直説の教えを、麻原尊師が正確かつ現代人にわかりやすく説く。従来の仏教解説書では得られない生き生きとした教えを再現！

麻原彰晃の世界　PART8

仏教真理・六波羅蜜

B6判　八〇〇円

在家修行者の修行を飛躍的に進める六つの極限「六波羅蜜」。「八正道」と並び、仏教の根幹をなす教えを、ただ一人の最終解脱者麻原尊師が正確かつ鋭く、わかりやすく説いた。

麻原彰晃の世界　PART9

尊師、聖地インドを行く

B6判　七五〇円

サキャ神賢悟りの地、初転法輪の地、入滅の地等を巡りながら、麻原尊師が真理の法を説く。仏教発祥の地、インドで説かれた尊師の教えの集大成登場！ サキャ神賢のヴァイブレーションを受けて、最高の奥儀もここに公開される。

麻原彰晃の世界　PART10
あなたを絶対幸福へと導く仏教の真髄

仏教真理・五蘊無我

B6判　六五〇円

わたしたちを構成する五つの要素（五蘊）を浄化し、愛欲界を超えてブラフマンの世界へ、そして、最終的には完全に止滅し、不死へと至る教えを集大成した瞑想家待望の書。

麻原彰晃の世界　PART11
大人気を呼んだ尊師大学講演会特集

自己を超えて神となれ！

B6判　八二〇円

東大をはじめ京大、気象大など、九一年の大学祭で大反響を巻き起こした麻原尊師講演会。その、仏教のエッセンスを巧みに説いた講話に加え、人気を博した質疑応答も掲載した話題の書。

麻原彰晃の世界　PART12

仏教真理・十二縁起

B6判　六二〇円

サキャ神賢が説かれた、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜へと至る「十二縁起の法」。このプロセスを自ら体験された最終解脱者・麻原尊師が、詳細に解き明かす「十二縁起の法」の真実。

麻原彰晃の世界　PART13
麻原尊師インタビュー特集

これが尊師！

B6判　五七〇円

麻原尊師が最終解脱者の純粋観照智によって、宗教・人生論・宇宙観・科学など、あらゆる分野にメスを入れる。「朝まで生テレビ」にも出演し、話題を呼んだ尊師の生の声を一挙掲載！

麻原彰晃の世界　PART14
これがオウム真理教

宗教の条件

B6判　五七〇円

今、本物が明らかになる！ 真の宗教の条件とは？ 宗教ブームといわれる中、様々な宗教団体の中から間違いないく本物の宗教を選び出すための条件を、あますところなく説き示す一冊。

麻原彰晃の世界　PART15
仏教実践における在家幸福への道

絶対幸福への道

B6判　六二〇円

最終解脱者・麻原尊師が、幸福になるための最速・最短の道をあなたに伝授する！ あなたを確実に幸福へと導く秘法が満載された在家修行者座右の書、ついに登場！

麻原彰晃の世界　PART16

麻原彰晃 方便品

B6判　七二〇円

難解な仏教の比喩・奥儀が現代的に説き明かされた！ 麻原尊師が巧みな方便でわかりやすく解説。読んで、考え、実践するための、本物のお経を公開！

マハーヤーナ・スートラ PART2

B6判　二一〇〇円

「南伝大蔵経」に遺されたサキャ神賢の教えと真理を現代に甦らせる尊師の説法。そして、法にのっとって実践した弟子たちの体験談。読んで、考え、実践するための「本物のお経」がここに。

すべてが思いのままになる

超能力秘密の開発法

新・増補大改訂版

B6判　一二六〇円

超能力のつかない修行はニセモノだ！すべてが思いのままになる縦横無尽の神秘の力があなたのものに。驚異の神秘力を有する麻原尊師が、秘密の修行を惜しみなく公開！

癌・エイズだって怖くない!!

超能力秘密のカリキュラム

健康編・改訂版

B6判　一一〇〇円

アレルギー性鼻炎から癌・エイズまで、西洋医学の限界を破る治療法を病名別に詳しく紹介。さらに、超健康体・超能力をもたらし、霊性を飛躍的にアップさせる秘儀を満載。

原始仏典講義一

A5判　二五〇〇円

どんな学者も修行者も説き明かせなかったサキャ神賢の真理の法を、最終解脱者・麻原彰晃尊師が鋭く解説。いにしえの真実が、ここに生きた教えとして復活した！

幸福の科学の会員よ聞きなさい―

真実の仏陀の教えはこうだ！

B6判　九八〇円

こんなにも違う、真の仏陀の教えと幸福の科学大川隆法の教え。すべての仏典を熟知した最終解脱者・麻原彰晃尊師が大川流仏法の大ウソをズバリと正す。

百問百答

B6判　九八〇円

「人生うまくいかないな」とお嘆きのあなた。すべてを知り尽くした麻原尊師が、"運命転換の道"をあなたに伝授。実際に幸福を得た人々の体験があなたに希望の灯火を。

甦るクンダリニー・ヨーガ文明

古代エジプトの秘儀を解く

B6判　六六〇円

神秘の国エジプトで麻原尊師が発見した驚くべき真実。ピラミッド、スフィンクス、ヒエログリフ……。あまたの古代遺跡は、何を語りかけていたのか？　封印されたエジプト古代文明の謎が、今解き明かされる！

パーリ語文法入門書

PALI MADE EASY

パーリ　メイド　イージー

A5判　一八〇〇円

Ven. E. Ānanda Maitreya Mahānāyaka Thera, D.Litt. 著

スリランカ最高の叡智、アーナンダ・マイトリー高弟が、難解とされてきたパーリ語文法をわかりやすく解説。豊富な例と例題で実力が養える。仏典を原典で学びたい方には必携のパーリ語入門書。

本部・各支部ご案内

富士山総本部　0544(54)1267
〒418-01　静岡県富士宮市人穴381-1
東京総本部　03(5467)2745
〒107　東京都港区南青山7-5-12
マハーポーシャビル2,3F
世田谷道場　03(3327)8565
〒156　東京都世田谷区赤堤2-42-5
杉田村松ビル1F
杉並道場 03(3396)9393
〒167　東京都杉並区下井草4-4-4
井口ビル2F
札幌支部　011(241)4938
〒060　北海道札幌市中央区北2条西2丁目
19-1 チサンホテル本館2F
仙台支部　022(268)3904
〒982　宮城県仙台市若林区河原町
1-4-20 十全会ビル2F
水戸支部　0292(26)8044
〒310　茨城県水戸市中央2-2-1
HDビル6F
高崎支部　0273(46)1573
〒370-12　群馬県高崎市倉賀野町
下稲荷前1081-5
船橋支部　0474(66)4965
〒274　千葉県船橋市新高根6-26-18
横浜支部　045(243)8079
〒231　神奈川県横浜市中区若葉町3-41-2
コスモ伊勢佐木長者町ビル204
金沢支部　0762(51)8457
〒920　石川県金沢市京町25-20
ソフトオフィスビル2+4 2F
松本支部　0263(28)7429
〒399　長野県松本市芳川野溝527-3
福井支部　0776 (26) 6145
〒910　福井県福井市御幸3-3-41
東伸ビル2F
名古屋支部　052(252)0709
〒460　愛知県名古屋市中区栄5-8-14
万国ビル3F
京都支部　075(371)3759
〒600　京都府京都市下京区堀川通り
松原上ル五軒町384 松本ビル2F
大阪支部　06(251)4264
〒541　大阪府大阪市中央区久太郎町3-2-15
マルイビル1F,B1F

堺支部　0722(21)1843
〒590　大阪府堺市海山町4-168-9
和歌山支部　0734(24)2859
〒640　和歌山県和歌山市駿河町42
和歌山酒販会館2F
広島支部　082(264)7252
〒732　広島県広島市南区西蟹屋4-4-18
和田ビル3F
高知支部　0888(84)8286
〒780　高知県高知市はりまや町2-8-8
安藤ビル2F
福岡支部　092(474)2877
〒812　福岡県福岡市博多区博多駅前
2-6-15 第一渡部ビル6F
那覇支部　098(866)9537
〒902　沖縄県那覇市安里2-4-12
嘉数グラビアハイツ5F
深谷出張所　0485(74)6205
〒366　埼玉県深谷市萱場441-8
渋谷出張所　03(3476)5065
〒150　東京都渋谷区道玄坂1-15-3
プリメーラ道玄坂317号
若林出張所　03(3418)4147
〒154　東京都世田谷区若林1-1-2
藤和シティコープ若林602号

〈海外支部〉
ニューヨーク支部　212(421)3687
8 East 48th St. #2E (2nd Floor),
New York, N.Y. 10017 U.S.A.
ボン支部　(0228)616647
Auf dem Hügel 48, 53121
Bonn　S.R.Germany
スリランカ支部 (AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION)
Horahena, Watte, Angulugaha,
Galle, Sri Lanka
モスクワ支部　7-095-455-95-32
Kindergarten No.468, 32A
Petrozavodskaya ul. Moscow,
125475 Russia

根源仏典3
記憶修習の現象化に関係づけられた経典
（サティパッターナ・サンユッタ）

一九九三年九月二十五日　初版発行

定価　一一五〇円
責任監修　真理の御魂　最聖　麻原彰晃尊師
発行者　松本知子
　　　　石井久子
発行所　株式会社オウム
東京都世田谷区世田谷二－八－一七
郵便番号　一五四
電話　〇三（三四三九）六〇四三
振替　東京二－一〇九三二五

ISBN4-87142-086-8 C0315 P1150E

根源仏典 3

記憶修習の現象化
に関係づけられた経典
Satipaṭṭhāna-Saṁyutta

ISBN4-87142-086-8 C0315 P1150E
定価1150円（本体1117円）